

明治三十三年六月出版

國立中央圖書館

91
12

讀書錄

國立中央圖書館

不許複製

珍書の索引

古文舊書考

島田

翰著

(漢文)

日本製四號活字 美本全四冊

定價金三圓五十錢 郵送料十五錢

古書の校勘鑿術は、讀書界に於て、最も必要の事業たるを以て、和漢の學者此業に従ひ、著述少からずと雖も、多くは誤謬を傳へずんば、杜撰に陥り、未だ以て學界の指針と爲すに足らず。本書は著者が五年の歲月を費し、刻苦勞索の結果に成るものにして、眞に明治年間の讀書界に、貢獻したる、昭著の産物也。伊藤侯、西園寺侯、支那の大儒翁曲園、竹添井々、小牧昌業、細川潤次郎、大槻如電、内藤湖南、矢土錦山、高島九峯其他諸先生の高評、至れり盡せり。隋唐の書鈔、宋、元、明、清、朝鮮板、及び我が文祿以上の書板に及ぶ。凡そ珍籍に關するの考證、未だ此書の如く、精實博該なるはなし。即ち此書は珍籍の手引のみならず、此書自らが珍籍也。發行部數三百五部にして、其の殘部剩す所幾許もなし。他日假を倍するも、或は獲難からんことを恐る。書籍に關する趣味を有するの君子は、速かに購讀せられんことを希望す。

東京

民友社發行

竹添井々序
島田翰校

(近日刊行)

宋大字本寒山詩集

合裝 天下稀有
一冊 世間罕覩
之珍籍也

寒山

豊子拾得の三隱集は、傳世極めて希にして、宋元明の三藏及び高麗威儀に未だ採取せ
に非ず。秘簡に宋大字本あり、本邦も亦正中以下數本の刻本ありと雖も、奪落後改竄に眞本
更に妄改せず。又其の卷首に附せる朱子陸放翁真蹟の手帖は、直に鈔摹上木し、其の精は本邦
古版の比にあらず。誠に薩天錫の雁門集は、元明數次の雕本あり。清の嘉慶丁卯に至り、
寒山集の第一本なり。薩天錫の雁門集を參校し、折て十四卷となし、續は汲古閣本
に越え、數は康熙刻本に過ぎ、稱して直齋集の完本と云ふも、未だ是の書中の一首をも收めず。
蓋し是の書は雁門集以外に單行せるものにして、是れ亦明清の佚書なり。故する所、七律百有餘
首、流麗清婉皆誦すべし。今永和丙辰刻本に據りて活刷に付し、寒山集と合訂一冊となし、將に
特志の人に於て、本篇は人間窺ふべからざるの秘笈なるを
以て、一々番號を記入し、一號より五百號に至る
内三百五十部のみを發賣す。眞に天上稀有の珍籍と云
ふも、適當にあらざる也。

東京 民友社發行

徳富猪

一 郎 著

國民叢書

次 目

七 版

進歩乎退歩乎

定 價 金 拾 錢

郵 税 金 貳 錢

◎保守的反動の大勢◎新保守黨◎日本國民の氣風◎明治年間の鎖國論◎外人の諷言果して幾何の價値あるか◎民信なくんば立たず◎國歩艱難に處する國民の自信力◎二十餘年間國力の發達◎改革の偉業は遠大を期せざるべからず◎偉大なる國民

二十 版

人物管見

定 價 金 貳 拾 錢

郵 税 金 四 錢

◎明治の二光生(福澤諭吉君と新島襄君)◎三島通府君◎森有禮君◎板垣退助君(政治家の徳義)◎政治界の三隱居(大隈、伊藤、井上三伯)◎明治年間一種の人物(鳥尾子爵)◎新島先生没後の同志社◎『文字の教』を読む(文學者として)◎山縣伯に與ふるの書◎徳川武士の典型(沼間守一君)◎矢野文雄氏◎元田東野翁◎板垣伯に與ふるの書◎君子國の眞君子(中村敬字翁)

二十版

青年と教育

定價金 貳拾錢
郵税金 四錢

◎同志社學生に告ぐ◎先づ高等中學を廢すべし◎多學の弊乎、無學の弊乎◎學風論◎小學の德育◎小學校及び小學教育◎教育界の時事◎社會の原動力◎明治の青年と保守黨◎心理的老翁◎教育界の羅馬法王◎博士製造◎書を讀む遊民◎勞作教育◎女子教育の事◎帝國大學と官吏登用法◎少數者の責任◎卒業

卅二版

靜思餘錄

定價金 貳拾錢
郵税金 四錢

◎インスピレーション◎田舎漢◎得意と失意◎朋友◎知己難◎衝突、撞着◎僥倖心及冒險心◎健康◎故郷◎故郷の春色今若何◎老人と小兒◎幽寂◎法律以外◎無名の英雄◎一年中の安息◎現金世界◎明日◎希望◎非厭世◎餘裕◎體面◎雅量◎平民の道德◎天地悠々◎快樂◎談話◎觀察

十七版

文學斷片

定價金 貳拾錢
郵税金 四錢

◎近來流行の政治小説を評す◎新日本の詩人◎同◎文學者の目的は人を樂ましむるにある乎◎

◎言論の不自由と文學の發達◎愛の特質を説て我邦の小説家に望む◎文學界の怪事◎天然と同化せよ◎歸省を讀む◎好伴侶としての文學◎作文小言◎梅花詩集に題す◎書翰◎偉大なる思想◎櫻花◎文學者の新題目◎詩中の人物論◎平民の詩人◎熱海だより(番外)◎文學社會の現狀◎秋玉山の詩◎郵便はがき◎作者と讀者◎一年の好時節◎讀書餘錄◎基督教の文學◎郭公◎流行の變遷◎俳句大繁昌◎看花◎文學者と政治家◎飽食暖衣は文學の敵なり◎批評と著述◎暑中の快樂◎專門以外◎早魃◎人物評論の流行◎身涼と心涼◎夏日の讀書◎狂亂の詩人◎人は信仰に依りて生活す◎社會の趣味◎朝の東京◎夏の朝◎徳川時代の歴史◎文章の能事◎書齋的臭味◎

十四版

天然と人

定價金 貳拾五錢
郵税金 四錢

阿蘇の煙◎東海道旅行記◎總選舉夢の痕(◎總選舉夢の痕◎熱田客舎よりの書信◎大坂よりの書信◎大坂よりの第二書信◎熊本縣八代よりの書信◎熊本縣宇土よりの書信◎熊本よりの書信◎熊本縣菊池よりの書信◎熊本縣玉名郡よりの書信◎長崎縣島原港外よりの書信◎熊本縣天草郡町山口よりの書信◎熊本縣人吉よりの書信)◎熱海だより(熱海道中◎來宮の老楠と梅園◎伊豆山◎日金山登臨◎熱海の盛衰◎何故?◎溫泉寺◎初島の記◎溫泉の過去及び現在◎吉田松陰物語◎熱海の名産◎平民道德の實行者◎小學教育◎(再ひ)小學教育◎熱海繁昌恢復策◎逗子だより(◎避暑の先登◎村社祭禮、鎌倉見物◎神武寺參詣◎逗子浦の慰み◎江の島舟遊◎相摸洋の月色)◎傍觀傍聽◎選舉涉干!干渉!干渉!◎勝利!勝利!勝利!◎珍らしや井上伯◎案外!嗟呼案外!◎青天白日公堂の秘密會議◎不信任議員の口より政府不信任の動議出づ◎長舌公と蟹甲君◎政治的古狂◎經費節減◎非言論自由と言論自由◎一錢一厘◎廢位議長◎播き

たるものは獲らざる可らず○條約履行○解放！嗟呼解放！

版九十

第二一 靜思餘錄

定價金 拾五錢
郵税金 貳錢

◎感激◎品格◎人事に於ける人心の作用◎富者の福音◎不老◎無學の學者◎人物◎天下の士◎
◎愛惜◎徒食◎上帝と人間◎累積の力◎生者死者との戦争◎精神的臆病◎攻撃、言語、品格◎
大量の嫉妬◎經濟と道徳◎遁世者◎一年の計◎情實病◎社會に無代價の物なし◎一方に破壊他
方に建設◎進化とは何ぞ◎専門以外の趣味◎社會の解體◎勤儉◎紳士の本色◎青年と負債◎善
を好む心◎假相と真相◎常識◎快觀派と悲觀派◎國家の大事と政治家の雅量

版十

風雲漫錄

定價金 貳拾錢
郵税金 四錢

◎大瀧隨行道中記◎新橋より名古屋◎名古屋雜記◎名古屋より神戸◎神戸より廣島◎朝鮮政
府の改革◎日清現今の形勢◎樺山と野津◎臨時議會の召集◎戦争は如何にして行はれつゝある
乎◎第一總論◎第二運輸、鐵道◎第三鐵道◎亂暴本部◎未曾有の議會◎伊藤の期讀演說◎米
價暴落◎天覽に入る◎大本營の位置、進まん乎退ん乎◎廣島の天然と人◎大本營地の天長節◎露
帝の崩殂、歐亞の大勢◎別筵漫興◎明治廿七年◎明治廿八年◎婦和使來◎有栖川總長殿下◎婦
和使歸る◎大瀧の渡海◎大本營の進轉◎丁汝昌◎清國侮る可からず◎日本武士の情け◎大本營
◎總論◎組織◎人物◎活動◎相思一片◎大總督府の進轉◎船中雜興◎金州瞥見◎遼東の春色

（短五巻）◎歸朝の消息（馬關檢疫所）◎大元帥陛下及凱旋の軍隊

版一十

家庭小訓

定價金 拾五錢
郵税金 貳錢

◎愛度き新年◎美はしき家風◎健全なる身體、健全なる家庭◎堪忍◎慈善◎孝養◎何を以て祝
せん乎◎看花の好時節◎新婚者への戒◎女子教育の事◎手紙の事（附文言と書風）◎手近き道徳
◎書物の外にも學問あり◎家庭教育の事◎手近き家庭教育◎父母は教師なり家庭は學校なり◎
兒童の教訓としての談話◎家庭教育◎子供の衣服◎夏の樂み◎避暑の出來ざる人に向て避暑の
方法を示す◎旅行の健康、衛生（看護の心得）◎家庭の伴侶◎談話の種子◎一家の秩序◎生活の
程度◎家庭に於ける手工◎内職◎親類縁家の交際法◎來客を待遇する心得◎奉公人を使ふ心得
◎品物の贈答◎歳暮の家庭

版四

經世小策上卷

定價金 貳拾五錢
郵税金 四錢

◎外交の憂は外に在らずして内に在り◎社會經濟的の眼孔◎平民的運動の新現象◎公共心◎繁
文縟禮◎無形の法律、社會の制裁◎配財上の一變動◎社會の立法者◎吾人の先祖◎眞正の事務
家◎信の一字◎日本人種の新古郷◎空論國◎勞作、節用、貯蓄◎半面開化◎罪惡は貧賤者の專
有物にあらず◎日米同盟◎黄金萬能力◎單調病◎虛業家◎平民主義第二着の勝利◎齷齪世界◎

八版

寸

鐵

集

定價金拾五錢
郵税金貳錢

◎夢の損得◎昇平の象◎昨今の氣候◎櫻花の時節◎五月五日◎綠陰幽草◎梅雨(東京は詩人の版圖に入れり)◎梅雨、雨なし◎一滴千金◎心理的銷夏法◎暑中の快樂◎北海道の避暑◎旅行◎月光◎菊花◎冬の景色◎雪◎文學と世間◎平民的文學◎小説◎所謂小説家◎文學先生◎文學者と生活◎製本の時代◎眞正の學者◎少年文學◎我に音樂を興へよ◎劍舞と壯士芝居◎俚歌、俗謡◎樂器◎俚歌◎歌謡と氣運◎不破樓閣終不還◎翻譯難◎日本畫◎宮内省と日光廟◎學生の夢◎學生の生活◎社會黨の卵◎職業は眼前に在り(明治の青年)◎胸中の閉日月◎大學の教育◎年少新聞記者(主義と思想、當今の大問題を歴史的哲理的に研究せよ、時事に通曉せざる可らず)◎大新聞と小新聞◎犬言狼語◎社會と新聞紙◎日本の新聞と外國の新聞(一)◎日本の新聞と外國の新聞(二)◎廣告の多少と國民の活氣◎東京市民協同の精神◎京都の未來◎京都の新聞元◎支那人種の特徴(一)◎支那人種の特徴(二)◎支那人◎日本と支那◎大丈夫とは何ぞ◎所謂る血性男子なる者◎法律以外制裁なし◎迷信◎妄想(一)◎妄想(二)◎妄想(三)◎宗教家の本色◎悉く統計を信ぜば統計なきに若かず◎鯢と鰻との問答◎婦人と議會◎無事と無爲◎政治家の襟懷◎岩倉公の十年祭◎立憲政體と雄辯◎要談と閑話◎市民と兵士◎寒と熱◎寒氣と戦ふ◎征人の涙◎途中の口吟◎白衣漢と黒衣漢◎玉川閑行◎途上所見◎乾坤一布衣の臺灣に行くを送る◎花より團子の記◎二十八年を送る◎ヴォルカ河の風光(葉書)◎月明(葉書)◎日本人膨脹の勁敵◎馬匹の訓練◎馬匹改良◎風俗◎謀反の恩典◎洋袴の大小◎周旋屋◎工業の進歩◎露國の隱謀

八

◎奈良の大佛と人間◎發明者を厚遇せよ◎兒童の衣服◎工場に於ける少童少女の教育◎音物贈答◎政治家と經世家◎返子◎新年詩歌俳句◎日本の世界に寄與せしもの◎英國内閣と米國議長◎雜言(一)◎雜言(二)◎雜言(三)◎雜言(四)◎雜言(五)◎雜言(六)◎人間の相庭(一)◎人間の相庭(二)◎極東大勢論◎市俄吾の慈善家◎婦人◎三歴史家◎自から用ゆる皇帝◎人生の美德◎不朽

六版

文

學

漫

筆

定價金拾五錢
郵税金四錢

◎文人◎新聞記者◎題目と主張◎師弟論◎生死の際◎社會の勢力としての書生◎元龜天正と嘉永安政◎歴史小説◎農業本論を讀む◎新年の感激◎亡友雜歌◎高達夫の詩◎劉伯溫の詩◎詩經を讀む◎海舟先生と詩經を讀む◎螢雪餘錄◎閑窓獨言◎漫興◎葦草◎梅花◎返子だより◎病餘雜詩◎東京の天然◎歴史上に於ける長崎港◎海舟翁一夕話

四版

漫

興

雜

記

定價金拾五錢
郵税金四錢

◎日本國民趣味の墮落◎民衆に倭せざる政治家◎空文虛談の弊◎日本文明の淵源◎徳川幕府の外交(牛肉と牛乳)◎乗車者の懺悔◎福地櫻痴◎福澤翁◎中江兆民◎田口鼎軒◎森田思軒◎破堂と矧川◎内村と植村◎吾友浮田◎湖處子◎東北談(一)◎東北の特色◎二◎松島◎三◎中尊寺◎四◎職業◎五◎學校◎六◎監獄◎蘇峯一夕話(一)◎富士山◎二◎花◎三◎繪畫◎四◎新聞の

九

事)◎唐詩◎歴史と政治◎北溟遺珠◎熊澤蕃山◎めざまし艸◎アルノルドの書簡◎アレキザ
 ル、サエーマ◎ノルトンとチャイルド◎社交と政治◎美術家◎擬支那人の書簡◎十一月三日◎
 今年の秋◎三十年の除夜◎雪◎松に雪◎新聞記者の眼孔◎歌人の本意◎蕃山の代官論◎新俳句
 ◎本郷の火事◎ウヰクトリヤ時代の文學◎ヒチケレ根性◎御座候◎満眼の生意

版七

世間と人間

定價金 貳拾錢
 郵税金 四錢

◎論語を讀む◎匈加利 一六一六◎附言一則◎模範的日本人◎豊太閣◎立花宗茂◎大村益次郎
 ◎井上梧陰◎海舟先生◎川上將軍◎西班牙の政治家◎サン、イレール◎シーホルト◎比公と新
 聞紙◎虞翁逸事◎パーチル逸事◎英國見聞一斑◎山路愛山に與ふ 一一二

版六

社會と人物

定價金 貳拾五錢
 郵税金 四錢

◎代議政治と人物◎遵法的精神◎教育と遵法的精神◎社會の平凡化◎社會に對する義務◎一國
 の文野の標準◎帝國主義の眞意◎壯士の時代と策士の時代◎紀元節◎政治傷寒論◎上等社會◎
 社會の紀律◎實業社會の紀律◎青年に必要な物◎支那人に學へ◎精神的病症◎日本の商業的
 道德◎社會教育◎趣味の教育◎少年と小説◎先づ其の資格を備へよ◎留學生を論ず◎社交の生
 命◎社交上に於ける婦人の狀態◎婦人の教養◎集會の秩序及び作法◎愛市中心の培養◎東京市の
 改造◎東京市民の休日◎風俗を敦厚ならしむる道如何◎社會と新賢◎陳言◎難解の文◎華族富

豪の土着◎農業の快樂◎統計の興味◎職工組合◎京阪遊記(一)東京より大阪(二)大演習と大阪
 (三)帝室と國民(四)天王寺(五)大阪の人力車(六)京都(七)大原(八)歸途◎御殿場及び國府津
 一 二 ◎社會の待遇◎時代と人物◎讀書◎雜言◎英文學初歩◎二個の階級◎文章權衡の事◎佛
 國大統領の逝去◎北白川宮殿下◎大久保忠愷◎李帝と佛帝◎大院君◎伊達宗城侯◎金玉均を
 追懷す◎寺島伯◎淺田宗伯翁◎光妙寺三郎氏◎櫻洲山人◎愛國者の標本◎日本國民の恩人◎孝
 女千代◎土京の友人◎思軒君を悼む◎境野怡雲を憶ふ◎池田彌尾子

版八

生活と處世

定價金 拾五錢
 郵税金 貳錢

◎生活の意義◎立身◎人の一生◎人の生活◎生活の快樂◎精神的食糧◎成功と失敗◎士人的階
 級◎商業教育の基礎◎遠人を待つ道◎田舎と都會◎社交界の擴張◎協同生活◎中等階級の困
 窮◎調停的精神◎羅馬人の道路◎一家の歴史◎長幼の序◎日常の献身的行爲◎婦人相互ひの交
 際◎老婦人會の事◎小供に公共心を養はしむる事◎恭敬の心を養はしめよ◎家庭教師の事◎一
 家の奉公人◎訪問の事◎容貌威儀◎愛嬌の事◎奥床しき事◎柔和なる返事◎優美の趣味◎和歌
 の事◎歩行の事◎質素の事◎清潔を好むの習慣◎青年學生の夏期の生活◎銷夏法◎爐邊の生活

版九

日曜講壇

定價金 拾五錢
 郵税金 貳錢

○平凡の生活○快樂を求むる方面○紀律と鍛錬○昨日、今日及明日○自から教育せよ○嗜好論
○町村の子弟○常識の教養○趣味の實物教育○協同一致○文學と人生○文學としての論孟○少
年の夢○愛國心と常識○衣食の憂○天真爛漫○理性の教養○隣人に及す教化○ゲエテの格言○
政治上の節操○誤解○門戸開放

五 處世小訓

定價金 拾五錢
郵税金 貳錢

○天下の憂○北清に於ける教訓○靈天と晴天○服従と獨立○名實論○觀察論○平常の場合に於
ける愛國心○金錢○高蹈勇退○社會的感情○輕信輕疑○有恒論○有恒の實例○人様々○二十世
紀の特色○同情の範圍○尙友論○協同一致と教育○ホスピタリチー○受容と離隔○事務的修練

四 人物偶評

定價金 貳拾錢
郵税金 四錢

○瘠我慢の説を讀む○福澤諭吉氏を吊す○黒田清隆伯○南白遺稿を讀む○星亨○大田黒惟信○
大西操山○惠磨遜○ラスキン○サー、ヘンリー、アックランド○史家の父○哲學的史家の巨人○
王荊公の絶句○讀史偶談

三 教育小言

定價金 拾五錢
郵税金 四錢

○世界の趨勢と教育の方針○教育家は時務に通ぜざる可らず○平凡なる道德○教育上より見た
る個人の價値

五 第二日曜講壇

定價金 貳拾錢
郵税金 四錢

○帝室と社會の風教○恭敬論○愛嬌論○手段と目的○負け吝みの論○風雅論○集會の作法○生
活の程度○高雅なる生活○手藝と慈善○演慮論○有待論○汽車の乗客○最後の十五分間○非割
檢論○自己中心主義○案外論○服装論○取捨の辨○旅箱の改良○草木禽獸○無藝無能者の快樂
○若旦那○若隱居○急歩平徐行乎○無欲と多欲○氣隨氣儘○戀哲論○洗濯の説○氣焔及氣焰家
○人物崇拜○無茶苦茶の説○簡易生活○文弱と文明○若朽論○現狀に安着するの得失○光陰惜
しむべき乎

五 第三日曜講壇

定價金 貳拾錢
郵税金 四錢

○日英同盟の國民的性格に及ぼす影響如何○世界的市民○支那人の見たる日本人○豊大閣の片
影○刺客論○政治的教育と新聞紙○郷先生○先進と後進○現金の學問○平民社會に於ける趣味
の教育○先生國○接續論○久敬論○無頼者の論○漫に慷慨家を擬する勿れ○自制と自動○意志
の存養○怪我の功名○嘆息病○世情の冷熱○自然と鍛錬○天然に對する觀察點○惡戯○野遊○
旅行○私塾の美風○自力の生活自得の學問○戰鬪論○蓄積論○國民教育の要旨○實業教育の要
旨

再版

近時政局史論

定價金 貳拾錢
郵税金 四錢

十四

◎一理窟は附け様により◎二七分の勝利◎三水臭からず◎四不時の來客◎五怪事又怪事◎六進
一步◎七必用の前に叩頭す◎八食方と借方◎九佐藤繼信◎十伏魔殿(上)◎十一伏魔殿(下)◎十
二相手は國民の財囊◎十三意外と油斷◎十四虎平捕乎◎十五鼎の輕重◎十六事業繰延◎十七無
理情死◎十八眞面目乎狂言乎◎十九暗中より暗中◎二十福は疲れて待て◎二十一綴帳芝居◎二十
二犬と猿◎二十三遺線細工◎二十四人様々の思惑◎二十五初度の開戦◎二十六意外又た意外◎
二十七内交と外交◎二十八偶然の手柄◎二十九謎頭◎三十凡惑俗情◎三十一常識以外◎三十二
天王山◎内閣更迭表◎議會表◎解散表◎總選舉表

版四

第四日曜講壇

定價金 貳拾錢
郵税金 四錢

◎平々論◎多言と寡言◎結婚論◎國民と志望◎國民の理想◎冒險心と僥倖心◎狐社逡巡◎雷同
◎短氣と短慮◎内部の生活◎報酬論◎今日以外の政治◎樂む所如何◎獨樂と偕樂◎側面より觀
たる倫約論◎富貴の子弟◎非遊民◎場合◎姑息なる公平◎言者と聽者◎虛榮論◎補綴論◎運動
倒れの説◎昨非今是◎引込思案◎平易なる真理◎職業に對する愛情◎若先生と老書生◎休養僻
の國民◎婦人の行儀◎國民教育の方針

版四

第五日曜講壇

定價金 貳拾錢
郵税金 四錢

◎東亞の日本と宇内の日本◎日本人と支那人◎家と國◎黃禍論の反響◎避暑の興味◎赤切符◎
狭む所なし◎仰山病◎油虫の説◎苦學と樂學◎以心傳心◎後詰の説◎戀舊と趁新◎競争の範圍
◎競争◎書く人と讀む人◎今日と永生◎運星◎偶然◎自然の秩序◎乘除論◎朝氣と暮氣◎品質
と數量◎義憤論◎從軍◎尋常と非常◎從政名言を讀む◎讀餘雜抄◎雜言數則◎家庭と學校◎無
藉者の宗教觀

版三

第六日曜講壇

定價金 貳拾錢
郵税金 四錢

◎我が國民の抱負◎日露戦争の副産物◎遠征の同胞◎戦争と教育◎敵味方◎小原因、大結果◎
力の善用◎日本人知り難からず◎世間知らず◎個人の活動◎第三者◎國自慢◎鈍根論◎寛猛論
◎椽の下の力持◎他山の石◎青年の氣風◎其次論◎勘定説◎國事に對する興味◎樂國主義◎苦
中の樂◎簡易生活(再び)◎不老の説◎一轉の説◎見切り◎秘密◎彌次馬の説◎『讀書録』を讀む
◎讀書雜記◎心の花と頼山陽の書牘◎俚諺

十五

士人博覽群書。本以資益性識。而返以記持。古人言語。蘊在胸中。作事業。資談柄。殊不類聖人設教之意。所謂終日數佗寶。自無半錢分。とは、是れ大慧禪師の語にあらずや。記者の如きも、亦た終日佗の寶を數へて、自から半錢の分なきもの耶、否耶。

然りと雖も何人にも道樂なきはなし。記者の如きは、單

38 6 8
 内交

に性識を資益するのみならず、更らに道樂の爲めに、讀書を事とす。閑あれば讀み、閑なきも讀む。必らずしも經世實用の書にあらず。苟も吾か心を慰め、吾か性を樂ましめ、吾が神を爽かにし、吾が氣を安するもの、併せ採りて、禁ずる所なし。豈に夫れ學を好むと謂はんや。要唯た一種の道樂のみ。酒を飲むが如く、烟を喫するが如く、圍碁の如く、骨牌の如く、球戲の如きと、一般のみ。而して本書は、則ち其の道樂の結果のみ。少くと

も結果の一たるのみ。

世間或は記者と、同癖の士なきにあらざる可し。是れ敢て本書を編して、諸君の清興に資せんと欲する所以也。豈に多大の要請ありと謂はんや。

明治三十八年 五月念四

於國民新聞編輯局 蘇 峯 學 人

讀
書
知
要

國民叢書 讀書餘錄
第二十八冊

目次

○書 籍……………(明治三十五年十二月十四日)……………一

○『蘭學事始』を讀む……………(明治三十六年四月十九日)……………一六

○『敬字文集』を讀む……………(明治三十六年十一月一日)……………三七

○『左氏會箋』を讀む……………(明治三十六年十月十八日)……………五一

○黃檗山の一切經……………(明治三十五年九月七日)……………六三

○『一年有半』……………(明治三十五年九月十五日)……………七〇

○『成功論』を讀む……………(明治三十四年二月九日)……………八二

- 『透谷全集』を読む……………(明治三十五年十月五日)……………九一
- 『湘烟日記』を読む……………(明治三十六年五月十日)……………九八
- 十年の追懐……………(明治三十七年三月三十日)……………一〇九
- 『新聞記者の十年間』に題す……………(明治三十五年六月十七日)……………一一五
- 『米僊書談』に序す……………(明治三十四年九月十六日)……………一二一
- 『時務三論』に序す……………(明治三十四年十二月十三日)……………一二五
- 『二十世紀新論十種』に序す……………(明治三十四年十月十一日)……………一二八
- 『濟民記』に序す……………(明治三十四年十一月十一日)……………一三〇
- 『帝國主義と教育』に題す……………(明治三十四年七月十日)……………一三二
- 『惠磨遜の書簡』に題す……………(明治三十四年七月三十日)……………一三八

- 『ヱキクトリヤ女皇』に序す……………(明治三十四年十一月廿二日)……………一四一
- 『近時極東外交史』に序す……………(明治三十六年十二月十七日)……………一四五
- 『近時之外交』に序す……………(明治三十六年十月十七日)……………一四七
- 『帝國建設者』に序す……………(明治三十七年七月十四日)……………一五〇
- 到來の珍籍……………(明治三十五年七月二十日)……………一五四
- 讀史漫言……………(明治三十六年一月一日)……………一六三
- 讀餘雜記……………(明治三十六年八月九日)……………一六六
- 拂暑快文……………(明治三十六年八月十五日)……………一七一
- 極秘卷……………(明治三十六年八月十八日)……………一七七
- 太宰春臺の書簡……………(明治三十六年九月二十日)……………一八一

- ◎頼襄の書簡……………(明治三十六年十月四日)：一九一
- ◎王陽明の詩……………(明治三十六年一月廿五日)：二〇二
- ◎別離の情……………(明治三十四年六月二日)：二一五
- ◎天才と勉強……………(明治三十四年七月七日)：二二三
- ◎ゲエテの格言……………(明治三十四年四月廿一日)：二二七
- ◎春窓漫筆……………(明治三十五年三月廿一日)：二三〇
- ◎午睡漫録……………(明治三十四年八月十八日)：二三五
- ◎書窓獨語……………(明治三十六年六月七日)：二四一
- ◎驅暑小言……………(明治三十四年八月廿五日)：二四七
- ◎隨筆の隨筆……………(明治三十六年七月廿六日)：二五四

- ◎書牘三片……………(明治三十四年八月廿五日)：二六〇
- ◎愛吟一二……………(明治三十四年三月十日)：二六五
- ◎外より見たる日本人……………(明治三十四年二月十一日)：二六八
- ◎言語文字と文章の關係……………(明治三十二年十一月一日)：二八八
- ◎青年と新聞記者……………(明治三十五年七月廿二日)：三〇五
- ◎讀書論……………(明治三十五年五月十八日)：三二三

讀書不體貼向自家身心上做工夫。雖
盡讀古今天下之書猶無益也。

國民叢書
第廿八冊
讀書餘錄

書籍

東坡李氏山房藏書記

嘗て東坡の李氏山房藏書記を讀む、曰く、
余猶及見老儒先生。自言其少時欲求史記漢書而不可得。幸
而得之。皆手自書。日夜誦讀。唯恐不及。近歲市人轉相摹刻。諸子百
家之書。日傳萬紙。學者之於書多且易致如此。其文詞學術當倍
蕪於昔人。而後生科舉之士。皆束書不觀。遊談無根。此又何也
と。夫れ北宋の時代に於て、此の嘆ありとせば、今日に於ては、更に
如何ぞや。吾人は東坡居士が今日に出で來らざるを、幸と爲す也。
若し近世文明の恩惠を數へば、其の重なる一は、書籍の普及にある可

し。今日に於ては、書籍程廉價なるものなく、書籍程獲易きものはあらず。所謂る昔人の奇書珍籍なるものも、今は活版に印し小冊に縮め、一個年にて、容易に読み盡す能はざる、分量の書籍をも、一回の晚餐費の半を以て、辨し得るに餘りあるものある也。此の如く書籍の普及したるに拘らず、忠實なる讀書生の、其の割合に増加せざるは何ぞや。是れ吾人が東坡居士の浩嘆に、更らに輪をかけて、浩嘆するを、禁ずる能はざる一事と爲す。願ふに是れ容易に書籍の獲らるゝか爲めに、之を愛讀熟誦するの念を生せざる乎、將た他に理由ある乎。

先輩が如何に書籍を獲るに、苦心したるかは、吾人後生の想像にさへ尙ほ餘まるものなからず。物徂徠の如き、其の少時南總に流寓したるや、手中只だ大學諺解一卷のみなりしと聞く。更に蘭學の率先者、杉田、前野、大槻諸先生が、如何に苦心したるかは、今日の苦學を名として、

他人に乞貸する柔弱書生の、夢想する所にあらざる可し。吾人嘗て故渡邊洪基君に聞く、君等の英學を修むるや、先づ字引を謄寫したりと。更らに勝海舟翁に聞く、翁の蘭學時代には、和蘭辭書一部の時價、實に六十兩の高直なりき。翁や固より一貧洗ふが如し。之を購ふの資力ある可き理なし。然も百方苦心の末、蘭醫赤城某が秘藏せる辭書を、一個年十兩の謝料を約して、之を謄寫したり。單に一部のみならず、兩部謄寫したり。翁其の卷末に記して曰く、

弘化四丁未秋業に就き翌仲秋二日終業予此の時貧骨に到り夏夜無懈冬夜無衾唯日夜机に倚て眠る加之大母病氣に在り諸妹幼弱不解事自ら椽を破り柱を割て炊く困難到于爰又感激を生じ一歲中二部の謄寫成る其一部は他に鬻ぎ其の諸費を辨す嗚呼此の後の學業其の成否の如き不可知不可期也

と。嗚呼數行の文字、以て千言萬語の青年立志篇よりも、有力なる立志の龜鑒たる可し。之をウエブスターの大字書さへも、何人の卓邊に安置せられ。乃ち世界相識の寶庫たる大英百科字彙さへも月賦の方法にて、所有し得らるゝ今時に比すれば。焉んぞ隔世の感、更らに切ならざるを得ん哉。

書籍を獲るとの難さ丈、それ丈忠實の讀書生、昔日に多かりしも、書籍を獲るとの易さ丈、それ丈忠實の讀書生、今時に少なし。即ち昔日には、書籍と情死せんばかりの讀書生ありしも、今は書籍の標題さへも、丁寧に眺むるもの寥々たり。切言すれば書籍普及して、讀書家（眞正の意義に於ての）愈々減少せんとするが如きの傾向なきにあらす。或は曰く、今日とても忠實なる讀書生なきにあらす、唯だ書籍が社會に普及する割合に、眞正の讀書生増加せざるのみと。或は然らば。

書籍を獲るとの容易なるが爲めに、書籍を取扱ふとも、愈々粗畧となり行くに似たり。是れ一概に嘆息す可らざる現象なれども、亦た無限なる欣喜の情を以て、驩迎す可き事柄にもあらず。均しく書籍なれども、其の種類亦た少からず。或は一時限りのものあり、即ち一讀乍ち之を放擲す可きものあり。或は恒に座右に備ふ可きものあり。或は不時の必要に應ずるが爲めに、保存せざる可らざるものあり。或は娛樂の爲めに、或は裝飾の爲めに、亦た或は書籍其物は、別段珍奇ならざるも、自個師友の手澤の存するが爲めに。或は少年苦學の紀念碑として、或は半生歴史の片影として、其の傍人に諒解す可らざる聯想の爲めに。連城の壁よりも、大切に愛護するものあり。然るに此の區別を無視して、一切之を等閑に附するが如きは、豈に心無き仕業にあらずや。

記して此に到れば、吾人は書籍貸借に就て、一言せざる可らざるもの

あり。今日に於ては、書籍貸借は、殆んど其の必要なきに似たり。然も如何に書籍を獲るとが輕便なればとて、有無相通するは、人生の常理也。況んや書籍の如きは、苟も之を丁寧に取り扱ふに於ては、用ひて竭さず、貸者に損なく、借者に益あるに於てをや。又た況んや今日の如く多數の書籍、出版せらるゝに於ては、如何に其の一部を得るとは、難からざるも、其の總てを得るとは、亦た易からざるの事情あるに於てをや。是れ近時に於て、書籍館の流行する所以なる可き歟。

世には門外不出杯と稱して、一切書籍を他人に貸覽せしめざるものあり。是れ徒らに書籍を愛するを解して、其の内容を愛するを解せざるもの也。苟も自から讀んで益あらば、他人の讀んでも益ある可く、即ち他人に奨勵して、讀しめてこそ其の樂を分ち、益を偕にするものと云ふ可けれ。然るに自から慳んで之を專有せんとするが如きは、寧ろ

大人の心地に遠きものにあらずや。

然も此の如き必要を感ずるに到らしむるもの、亦た理由なきにあらず。世には書籍を濫借して、決して之を返却せざるものあり。其の或者は、不注意より然るなる可く、其の或者は、故意にあらずとも、謂ひ難きものあり。物品の貸借と、金錢の貸借と、其の自他の有無を相ひ通ずるに於て、何の區別かある。然るに他人の好意を濫りにして、其の書籍を奪取し、恬として恥ぢざるが如きは、是れ實に解す可らざるの僻事也。然るに世人亦た之を寛假して、書籍を貸せば、十中の五六は、返却せられざるものと覺悟し居るが如きは、更らに解す可らざる也。諺に曰く書籍を貸すは、固より愚、然も借りて返却するは、更らに愚の至りなりと。吾人は實に此の如き諺の、實際を穿ちたるを嘆惜するもの也。多くの讀書子の中には、書籍其物を以て、一種の記録となすものあり。

即ち其の讀みたる書籍に、或は點を附し、或は所感を記入し、以て他日の備忘に供するものあり。若し此の如き書籍を、貸失するに於ては、假令新たに其書を再購するも、其の用を使せざるものあるを免かれず。況んや時としては、其書籍と日々相親み、宛も半生の知己、此中においてとしたるものに於てをや。文人の書籍に於ける、武夫の馬に於けるが如きものあり。然るに何物の狡兒ぞ、漫りに其の好意を濫りにし、之を奪掠し去るや。門外不出の四字、決して寛厚なる胸次より湧き來るの言にあらざると雖も、仔細に觀察し來れば、亦た幾何か恕す可き理由なき能はず。

請ふ此れよりしてモルレー氏の美學に就き。一言せしめよ、讀者は英國に於て、アクトン卿の名を記憶するならむ。卿は單に英國に於けるのみならず、亦た歐洲に於ける知名の史學者にして、其精該博綜、實

に一代の智識たり。虞翁の博洽なる、尙ほ此言をなせり、曰く若し疑義あらば、須らくアクトン卿に質せど。卿が一生の間、其の主一の目的の爲めに、蒐集したる書籍古文書、凡そ六七萬部。是れ悉く卿が研究の實用に資したるものにして、決して浮誇の飾品にあらず。其の晩年に迫んでや、富の福音の宣傳者にして、且つ實行家たるカーチギル氏之を購ひ、卿をして一生の間、之を享用せしめたりき。頃る卿の逝くや、氏は之れを其の尊敬する友人モルレー氏に贈與したり。若し世に此の貴重なる贈物を受く可き資格ある人を求めば、モルレー氏は、實に其人なりとす。而してモルレー氏が、如何に此の贈物を處措す可きは、讀書社會の頗る注意したる所なりき。然るに氏は此の贈物を自ら私しするに忍びず、之を故アクトン卿と關係ある、即ち卿が史學教授として、其の晩年に於て、講壇を飾りしケンブリッジ大學に寄贈せ

んと欲し、左の如き書簡を、其の大學總長デヴォンシャイ公に送りたり。
 デヴォンシャイ公閣下、閣下は數月前、友人の深厚なる懇情により、一
 の文庫が、即ち小生がアクトン文庫として世間に知られん事を望む
 所の文庫が、小生の手に移りたる事を御傳聞被成候ならんと存候。
 小生は、之を自己の用に供し、自己の樂みとなさんと欲するの空想
 を暫くの間起し居候。然れども小生は徒らに珍寶の所有に就て貪婪
 なるものには無御座候。人生は須臾のものに候故、斯の如き貴重な
 藏書は、私人の有となさずして公共不滅の團體に屬せしむるを適
 當と存候。細末の問題は、暫らく措き重要なる點に就ては、十分熟
 慮して、茲に小生は、閣下を總長として戴けるケンブリッジ大學に
 之を寄贈せんと決心し、之を受納せられん事を、恭しく閣下に向て
 希望致候。

此の文庫は、固よりチャットウォルスに於ける閣下の文庫中の珍籍の
 如きものを有せず、また大學及び古き文庫が、長き年代と廣き趣味
 によりて蒐集したる藏書と比するに足るものに無御座候。是れア
 クトン卿が、自由の歴史、良心解放の歴史、及び人間の政治に於け
 る權力と自由との交代の歴史の材料として蒐集したるものに候。此
 等六七萬部の書籍は、皆な此の目的を以て蒐集せられたるものにし
 て、此の一貫せる目的は即ち此等の書籍を統一するものに候。それ故
 小生は此の書籍を一團となし、幾分か他の書籍と別にして保存せん
 事を願ふものに候。小生は此の願がケンブリッジ大學に於て、容れ
 らるゝならん事を信ずるに至り申候。此の外には、之に付すべき條
 件は、一も無之候。
 三度びケンブリッジの學生たらんとして拒絶せられ、後終に講師とし

てケンブリッヂより聘せられたる、近時の最も顯著なる人物——其の學殖に於て顯著なる、其の識見の深さと廣さとに於て頗る顯著なる人物の適當なる紀念を、ケンブリッヂ大學は、斯の如くにして有し得べしと愚考仕候

小生よりも、より多く適當に其の價値を判定し得る諸學者の說によれば、此の文庫は、頗る貴重なる智識の用具たるべしとの事に候。されど此の文庫の價値は、之れに止まらず候。凡ての方面と、凡ての國語と、凡ての時代とに涉れる、此の多數なる書籍の秩序ある排列——文明諸國の政治の進歩、信仰と制度の發達、人間思想の變化、教會信條の紛争、種々の大政治家、宗教家、様々の國家の理想、凡て是れ、此を一見するのみにて、熱心なる學者に向て強き思想の刺激たらずんばならずと存候。歴史的智識よりも、歴史的思考は、遙か

に貴きものなりとは、實にアクトン卿が自ら言ひし所に候。而して、卿の藏書は、此の双方に向て同時に人を導く力を有し居候。其の冊數多しと雖も、凡て是れ近世史最要の問題を集中したるものに候。有名なる大學の中に、アクトン文庫の設けられたる事と小生の名とが、假令一時にても、ケンブリッヂに於て聯想せらるれば、小生の永久の榮譽たるは申すまでも無御座候。草々敬具。

十月二十日「明治三十五年」 ジョン、モルレー

苟も此の書簡を一讀するものは、如何にモルレー氏の人格の高尙にして、其の氣品の清純なるかを感ず可し。氏は當世の政治家として、英國自由黨の重なる明星の一なれども、其の最も處を得たるは、書齋的生活にある也。氏は決して書籍の眞價を解せざるの人にあらず、否な其の『之を自己の用に供し、自己の樂みとなさんとの空想を、暫らくの

間起し候』の一句は、實に其の愛惜珍重の衷情を、流露したるもの也。然も人生は短く、藏書は貴し、寧ろ之を公共不滅の團體に屬せしめんと決心したるは、實に取捨の道を得たるものにあらずや。東坡又た曰く、

余友李公擇。少時讀書於廬山五老峰下白石菴之僧舍。公擇既去。而山中之人思之。指其所居爲李氏山房。藏書凡九千餘卷。公擇既以涉其流。探其源。採剝其華實。而咀嚼其膏味。以爲己有。發於文詞。見於行事。以聞名於常世矣。而書固自如也。未嘗少損。將以遺來者。供其無窮之求。而各足其才分之所當得。是以不藏於家。而藏於其所故居之僧舍。此仁者之心也。

と。顧ふにモルレー氏の心も、亦た此の如けむ。眞に愛するを解するものは、其物をして、其所を得せしむ。奚んぞ啻た書籍のみならんや。

單た自から私するが如きは、鄙夫の業のみ。然り鄙夫の業のみ。然り未だ眞に之を愛せざるのみ。

書籍を死物として、取扱ふ勿れ、須らく生命ある伴侶として、待遇す可し。

明治三十八年 五月十一日。

記 者

『蘭學事始』を讀む

蘭學事始は、蘭學の、今少しく手廣く云へば、泰西學問の開山の重なる一人、杉田玄白先生が。八十三翁となりて、過ぎにし五十年來の蘭學開拓の事蹟を想起し、手録して、以て門人大槻玄澤翁に與へたる隨筆也。其の歳時を按ずるに、文化十二年にして、宛も歐洲にありてはウオターローの原野に、乾坤一擲の決戦をなして、大ナポレオンが、最終の運命に就きしと同時なり。

杉田先生は何人ぞや、彼は若州小濱藩の醫家に生れ、世々江戸に居る。和蘭外科は、其の世業たりき。彼の母は其の分娩の艱に惱んで死せり。不幸なる兒は、其家人よりして、不幸なる母と與に逝きたりと見做され。布片に掩ふて、褥側に措かれたり。須臾にして呱呱の啼を發する

を聞き、始めて之を顧み、且つ其の男兒なりしを見て、之を愛育したりと云ふ。彼は難産の兒たりし如く、學問の上に於ても亦た難産の母なりき。但だ五十年來の精苦は、生前に其の効果を收め。自から今昔を願望して、夢の如き愉快なる心地したるぞ。其の餘慶なれ。

彼の少時は、寧ろ放曠なりき。其の志を立てたるは、十七八歳の秋なりき。彼が前野良澤に伴はれて、江戸に來聘したる、和蘭客屋に赴き、大通詞西善三郎に會し、和蘭學の事を聽きしは、明和の初年なりしと云へば、其の三十歳前後なりしならむ。然も彼は通詞より和蘭學杯とは、到底役に立つ程、學び得可きにあらずとの言を聽き、疆めて學ばんとする心もなく止みぬと云へり。

彼は明和四五年の頃、大通詞吉雄幸左衛門の、蘭使に附隨して、江戸に來るに際し、其の門に入りて、外科術を學べり。而して彼は其の師

より、境樽二十挺を以て、交易したりと云ふ珍書『シニルゼイン』なる外科治術の一本を借覽し、其の書を読む能はざるも、其の圖の精良なるを見て、神躍り魂動き、晝夜を分たず、其の圖を模寫したり。彼は知らず、覺へず、蘭學に接近しつゝありき。

彼卅七歳にして、父の後を承け、愈よ外科を以て、家を成さんと欲し、發奮已まず。曾て惟らく和蘭の瘍科と唱ふるもの、譯官傳聞の誤謬に出で、信す可らざるもの多し。漢土の外科、又た空疎にして則とするに足らず。故に日本一派の外科を創建せんと欲し、其の手始めとして、漢土の書籍中、外科に關する要語格言を撰集せんと欲し、之を同藩の士、青野小左衛門に告る。青野之を嘉みし、問て曰く、其の書今ま幾許出で來ると。彼曰く唯だ志を發せしのみと。青野慨然として曰く、何爲ぞ猶豫する、明日を待つ可らず、宜しく今日より起稿せられよと。

彼其の言に感激し、即夜業を始め、遂ひに瘍科大成を撰集したり。青野は、實に彼に取りては、偶然なる獎勵者たりき。

彼が愈よ蘭學に、手を染めたるは、左の如き事情によれり。

蘭學に
志したる
事情

明和八年「翁年三十八歳」かのどの卯の春かと覺へたり彼「按ずるに翁の同僚中川淳菴」客屋へ至りて「ターヘルアナトミア」と「カスバリヌス、アナトミア」といふ身體内景圖説の書二本を取り出し來り望人あらばゆづるべしといふ者ありとて持歸り翁に見せたりもとより一字もよむ事はならざれども臟腑骨節これまで見聞する所とは大に異にしてこれ必ず實驗して圖説したるものと知り何となく甚だ懸望に思へり且つ吾家も從來阿蘭陀流の外科と唱ふる身なればせめて書筐の中にもそなへ置たきものと思へり然れども其頃は家甚だ窶々しくしてこれを求めるに力及びがたかりしにより我藩の大夫岡新左衛門

といへる人のもとに持行きしかくの次第なれば此蘭書求め度と告たり然れども力の足らざるは是非なしと語りしかば新左衛門聞さるれば求め置て用立つものか用立つものならば價は上より下し置かるべき様取計ふべしといへり其時翁それは必ずかふといふ目當迎はなけれども是非ともに用立つものにして御目に掛くべしと答へり傍に小倉小左衛門後野と改むといふ男居たりしがそれは何卒調へ遣さるべし杉田氏はこれを空くする人にはあらずと助言したり依之いと心易く願も望の如く調ひ得たり是れ翁の蘭書手に入りし始めなり

彼は此の如き便宜を得て、始めて蘭書を手に入れたり。書既に彼の有となる、學豈に修めずして、止まんや。

元來和蘭人の長崎に來港するとなりたるは、寛永十八年（西曆一六四一）にして、蘭書を讀むの特許を通詞の家に得たるは、爾後百餘年、八

代將軍吉宗の時なりき。從來の通詞は、唯だ耳學問にして、其の言葉を暗記したるに過ぎざれば、入組みたる用を辨す可らず。されば我々のみには、横文を習ひ、蘭書を讀むの特許を得たしと、和蘭陀通詞西善三郎、吉雄幸左衛門等の請願、此れが原因たりき。然るに幾もなく蘭書上覽の沙汰あり。其の挿圖の精巧なるを見て、八代將軍は、其の書中所記の、極めて有要なる可きを察し、御儒者青木文藏、御醫師野呂玄丈をして、之を習はしめ、此に於て數年の後、彼等は二十五文字單語等を解するに至りたりき。然るに之れを實用に供する迄に、學修したるは、實に青木の門人、前野良澤、即ち所謂蘭化先生其人と謂はざるを得ず。彼が青木の門に入しは寶曆の末、明和の初年にして、良澤の四十餘歳の時なる可し。彼曰く如何に國異に言殊なると雖も、同じく人の爲す所にして、爲す可らざる所あらんやと。

今や蘭學の開く可き、時機は到來したり。請ふ玄白先生其人をして、語らしめよ。

然るに此節不思議に彼國解剖の書手に入りし事なれば先其圖を實物に照し見たきと思ひしに實に此學開くべきの時至りけるにや此春其書の手に入りしは不思議とも妙とも云はんか抑々頃は三月三日の夜と覺へたり時の町奉行曲淵甲斐守殿の家士得能萬兵衛といふ男より手紙もて知らせ越せしは明日手醫師何某といへる者千住骨ヶ原にて腑分いたせるよしなり御望あらば彼方へ罷り越れよかしと言文をこしたり

彼の喜び知る可き也。然も彼は其の樂を獨享し、其の益を獨占するを欲せず。同志と與に、此業の開拓を心掛け、殊に其の先輩なる前野良澤翁に通じたり。其の曲折下の如し。

扱○斯○る○幸○を○得○し○事○を○獨○り○見○る○べ○き○事○に○も○あ○ら○ず○朋○友○の○内○に○も○實○業○に○厚○き○同○志○の○人○々○へ○は○知○ら○せ○遣○は○し○同○じ○く○視○て○業○事○の○益○に○は○相○互○に○な○した○き○も○の○と○思○ひ○量○り○て○先○同○僚○中○川○淳○菴○を○初○某○誰○と○知○ら○せ○遣○は○せ○し○中○か○に○良○澤○へ○も○知○ら○せ○越○し○たり○扱○て○良○澤○は○翁○よ○り○も○齡○十○ば○か○り○も○長○し○我○よ○り○は○老○輩○の○事○に○て○あ○り○し○故○相○識○に○こ○そ○あ○れ○常○々○は○往○來○も○稀○に○交○接○う○と○か○り○し○か○ど○醫○事○に○志○篤○き○は○互○に○知○り○合○た○る○中○な○れ○ば○此○の○一○擧○に○漏○す○べ○き○人○に○は○あ○ら○ず○先○早○く○申○通○し○た○く○思○ひ○た○れ○ど○も○さ○し○掛○り○し○事○且○つ○此○夜○も○蘭○人○滯○留○の○折○な○れ○ば○彼○客○屋○に○あ○り○け○る○ゆ○へ○夜○分○に○は○な○り○ぬ○俄○に○知○ら○す○べ○き○便○り○も○な○し○如○何○せ○ん○と○存○せ○し○が○臨○時○の○思○付○に○て○先○手○紙○調○べ○知○れ○る○人○の○許○に○立○寄○り○相○謀○り○て○本○石○町○の○木○戸○際○に○居○た○り○し○辻○駕○の○者○を○や○と○ひ○申○遣○せ○し○は○明○朝○し○か○く○の○事○あ○り○望○あ○ら○ば○早○天○に○淺○草○三○谷○町○出○口○の○茶○屋○ま○で○御○越○し○あ○る○べ○し○翁○も○此○處○ま○で○罷○越○し

待合すべしと認め置捨にて歸れと持せ遣しけり

其翌期とく支度整ひ彼所に至りしに良澤参り合ひ其餘の朋友も皆々
參會し出迎たり時に良澤一つの蘭書を懐中より出し抜き示して曰く
これは是れ「ターヘル、アナトミア」といふ和蘭解剖の書なり先年
長崎へ行きたりし時求め得て歸り家藏せしものなりといふこれを見
れば即ち翁が此頃手に入りし蘭書と同書同版なり是れ誠に奇遇なり
とて互ひに手をうちて感せり

觀臟の一事は、彼等に取りては、新たなる天地の開闢なりき。和漢醫
學の空疎用ゆるに足らざると、泰西醫學の精細確的鑿々として據るお
ることは、此の一舉に證明せられたりき。若し彼等當時の心事を想像せ
ば、摩西が、迦南の地を眺めたるが如く、十字軍人が、ジェルサレム
を望みたるが如く。無限の感謝、無限の喜悅、無限の希望、無限の雄

心湧き出したるなる可し。彼等は如何なる事を、談合したる乎。且
つ試みに之を聽け。

歸路は良澤、淳菴と翁と三人同行なり途中にて語り合しは扱々今日
の實驗一々驚入且これまで心付ざるは耻べき事なり苟も醫の業を以
て互に主君々々へ仕る身にして其術の基本とすべき吾人の形體の眞
形をも知らず今迄一日々々此業を勤め來りしは面目もなき次第な
り何とぞ此實驗に本づき大凡にも身體の眞理を辨へて醫をなさば此
業を以て天地間に身を立るの申譯もあるべしと共々に嘆息せり良澤
もげに尤千萬同情の事なりと感じぬ其時翁申せしは何とぞ此「ター
フル、アナトミア」の一部新たに翻譯せば身體内外の事分明を得今日
療治の上の大益あるべしいかにもして通詞等の手をからず讀み分け
たきものなりと語りしに良澤曰く予は年來蘭書よみ出し度の宿願お

れとこれに志を同するの良友なし常にこれを慨き思ふのみにて日を送り各がた彌々これを欲し給は、我前の年長崎へもゆき蘭語も少々は記憶し居れりそれを種として共々よみ掛るべしやといひけるを聞それは先づ喜ばしきことなり同志に力を戮せ給らば憤然として志を立て一精出し見申さんと答へたり良澤これを聞き悦喜斜ならず然らば善はいそげといへる俗説もあり直に明日私宅へ會し給へかし如何やうにも工夫あるべしと深く契約して其日は各々宿所々々へ別れ歸りたり

彼等は直ちに其の學問に取り掛れり、彼等は青年にあらず、彼等の或者は五十に近く、或者は四十に近き老書生なりき。而して彼等は如何にして、其の管鍵を捉へ得たりし乎。左に掲ぐる所は、一個の小説として讀むも、尙ほ其の興味の豊饒なるを覺へずんばあらず。

其翌日良澤が宅に集り前日のことを語り合ひ先づ彼「タイフル、アナトミア」の書にうち向ひしに誠に艦舵なき船の大海に乗出せしが如く茫洋として寄べきなく只あきれにあきれて居たる迄なりされども良澤は兼てより此事を心に掛け長崎迄もゆき蘭語並びに章句語脈の間の事も少しは聞覺へ聞ならひし人といひ齡も翁などよりは十年の長たりし老輩なればこれを盟主と定め先生とも仰ぐ事となしぬ翁はいまだ廿五字さへ習はず不意に思ひ立し事なれば漸くに文字を覺へ彼諸言をもならひしことなり

扱此書をよみ始るに如何様にして筆を立てしと談じ合しに逆も始り内象の事は知れがたかるべし此書の最初に仰伏全象の圖ありこれは表彰外象の事なり其名處は皆知れたる事なれば其圖と説の符號を合せ考ふことは取付きやすかるべし圖の初とはいひかた、先づこ

れより筆を取り初むべしと定めたり即ち解體新書形體名目篇これなり其ころは「デ」の「ヘット」の又「アルス、ウエルケ」等の助語の類も何れか何やら心に落ち付て辨へぬ事ゆへ少しつゝは記臆せし語ありても前後一向にわからぬ事計なり譬へば眉といふものは目の上に生じたる毛なりと有るやうなる一句髣髴として長さ日の春の一日には明らめられず日暮る迄考へ詰め互ににらみ合て僅一二寸の文章一行も解し得る事ならぬとにて有りしなり又或る日鼻の所にて「フルヘッヘンド」せしものなりとあるに至りしに此語わからず是は如何なる事にてあるべきと考合しにいかにもせんやうなし其頃「ウァールデルブック」書譯辭といふものもなくやうやく長崎より良澤求め歸りし簡畧なる一小冊ありしを見合たるに「フルヘッヘンド」の譯註に木の枝を斷ちたる迹其迹「フルヘッヘンド」をなし又庭を掃除すれば其塵

土聚り「フルヘッヘンド」すといふ様によみ出せりこれは如何なる意味なるべしと又例のごとくこじつけ考ひ合ふに辨へ兼たり時に翁思ふに木の枝を斷りたる跡愈れば堆くなり又掃除して塵土あつまればこれもうづたかくなるなり鼻は面中に在りて堆起せるものなれば「フルヘッヘンド」に堆といふことあるべし然れば此語は堆と譯しては如何といひければ各これを聞て甚だ尤なり堆と譯さば正當すべしと決定せり其時の嬉しさは何にたとへんかたもなく連城の玉をも得し心地せり如此事にて推て譯語を定めり其數も次第々々に増しゆく事となり良澤のすでに覺居し譯語書き留をも増補しけるなり其中にも「シンチン」(精神)などいへる事出しに至ては一向に思慮の及びがたき事も多かりしこれらは亦往々は可解時も出来ぬべし先づ符號を付置べしとて丸の内に十文字を引きて記し置たり其頃不知ことをば

轡十文字と名けたり毎會いろ／＼に申合せ考へ案じても解すべからざる事あれば其苦さの餘りそれも又くつは十文字／＼と申たり然れども爲すべき事は固より人に在り成るべきは天にありの喩の如くなるべしと如此思ひを勞し精を研り辛苦せしこと一ヶ月に六七會なり其定日は怠りなくわけもなくして各相集り會議して讀合ひしに實に不昧者は心とやらにて凡そ一年餘も過しぬれば譯語も漸く増し讀に隨ひ自然と彼國の事態も了解する様にて後々は其章句の疎き所は一日に十行も其餘も格別の苦勞なく解し得るやうにもなりたり尤每春參向の通詞どもへも聞糺せし事もあり又其間には解屍の事もあり亦獸畜を解きて見合せし事も度々のことなりき

彼等が好學の眞情、それ豈に掬す可きにあらずや。一日空しく暮せば、一日の死期を近く。一時徒らに過せば、一時の生を失ふ。人の斯世に在る、それ只だ醉生夢死するが爲めのみならんや。吾人は我が日本國民の祖先に、此の如き純粹、且つ忠實なる好學の大人君子ありしを想ふ毎に、未だ嘗て知己を千載に待つ心を生ぜずんばあらず。丈夫豈に空しく死す可ん哉。

此書は單に蘭學開山の諸君子が一身を學業に投沒し、精研不息の猛志硬行を舉證するのみならず、其の心事の極めて高潔にして、眞に學者たるの品性を發揚するもの、如し。世實に學を好む者多からず、偶々學を好む者あれば、猶ほ貨を好むが如く、唯だ之を己に私せんと欲す。是れ甚だ陋劣の心事なれども、剛強の氣象と、陋劣の心事とは、往々并立するを免かれず。吾人が諸君子に隨喜するもの、それ豈に好學の一事のみならんや。其の衆と偕に之を好むの心、最も欽嘆す可き也。それ眞理は、大海の如し。何人も之に棹さすを禁ず可らず、否な互ひに

討究精研してこそ、其の幾尋をも、探り得るなれ。學者先づ自から其の心を公平正大ならしめざる可らず。苟も狼僻邪險ならば、如何に萬卷の書を讀破するも、己に益なく、人に得なく、徒らに學問を踏臺として、其の私慾を逞ふするに過ぎざる可し。

此會業怠らずして勤たりし中次第に同臭の人も相加り寄りつとふ事なりしが各志す所ありて一樣ならず翁は一たび彼國解剖の書を得直に實驗し東西千古の差ひあるとを知り明らかめ治療の實用にも立て世の醫家の業にも發明ある種にもなしたく一日もはやく此一部を用立つ様になし見度と志を起せし事ゆへ他に望む所もなく一日會して解する處は其夜翻譯して草稿を立てそれに付きては其譯述の仕かたを種々様々に考へ直せし事四年の間草稿は十一度迄認めかへて板下に渡すやうになり遂に解體新書翻譯の業成就したり抑江戸にて此學を創

新體翻譯の業成就

玄白先生の心事

業して腑分といひ古りしとを新に解體と譯名し且社中にて誰いふとなく蘭學といへる新名を首唱し我東方闔州自然と通稱となるにも至れり是れ今時のごとく隆盛となるべき最初嚆矢なり

如何に彼等が忠實に、其の學ぶ所に盡したるかは、上記によりて、其の一斑を察す可し。而して最後に特筆せざる可らざるは、玄白先生の、解體新書譯成の心事是れ也。先生自から懷抱を叙して曰く、

今首めて唱へ出せるの業何として俄に事整ふて成就すべきの道理なし只人身形體の一事千載所説の違たる所を世に示し何とぞ其大體を知らせたく思ひし迄にて他に望む所なしと一決し右にもいへる如く一日會して解せし所を其夜宿に歸りて直に翻譯し記したため置たるなり同社の人々翁が性急なるを時々笑ひしゆへ翁答へけるは凡そ丈夫は草木と共に朽べきものならずかた／＼は身健かに齡は若し翁は多

病にて歳も長けたり往々此道大成のときは逆も逢ひがたかるべし人の生死は豫め定めがたし始て發するものは人を制し後れて發するものは人に制せらるるといへり此故に翁は急ぎ申すなり諸君大成の日は翁地下の人となりて草葉の蔭に居て見侍るべしと答ければ桂川(國瑞)君などは大に笑ひ後々は翁を諱名して草葉の蔭と呼び給へり斯るとにて年月は過行き白駒の隙過るよりも早くとかくせし間に三四年の月日を重ね遂々世の人も聞傳へて尋來るもありしゆへ西洋所説の臟腑經絡骨節等其既に知る所を以て大凡は其眞面目を語り示せるほどにはなりたり

是れ衆と偕に、學を好むのみならず、其の學ぶ所を以て、濟世の目的を達せんとするものなり。學者動もすれば、空想に流れて、實際を忘る。書齋に講究したる所を以て、之を天下に施さんと欲す。縱令其の

事の迂濶なるも、尙ほ獨善以て天下を睥睨するに優る。矧んや其澤、人に及び、其の功世に施くに於てをや。苟も世の讀書生にして、一片此の心あらば、天下を兼濟するに於て、何かあらむ。吾人が前賢に學ぶべき所、實に此の心にあるのみ。實に此の心にあるのみ。

『蘭學事始』は、眇然たる小冊也。然も其の吾人に教訓する所、一にして足らず。之を讀めば、單に前人が未だ測量せざる學海の暗礁に、小舟を棹し、百艱嘗め盡したるの跡を詳かにするのみならず。著者其人の寛厚、博大なる心地に接するの感なくんばならず。彼は五十年來の過去を顧りみて、一の悔恨なく、總ての感謝あり。彼は功を己に歸するが如き、小丈夫にあらず。然も他人に對して、公平なるが如く、自個に對しても、公平也。敢て寸毫も矯飭して、自個の適當なる分前を、隱蔽するが如き偽君子を學ばず。乃ち眞摯、平正の調子は、其の從容

たる氣象と與に、行間に溢れたり。彼が其の業、大いに世に行はれ、當時の將軍に謁見の榮を遂げ、八十歳の天年を以て、終りたるもの、良とに故なきにあらざる也。彼は文化十四年(西曆一八一八)に逝く、其の生年を按ずれば享保十八年(西曆一七三三)なる可し。善人福ありとは、此の事ならめ。

『敬宇文集』を讀む

文運明治時代に入りて、最も隆盛を極む。獨り漢學に於ては、此の斷言の外にあり。但だ此際に於て、中村敬宇先生の如きは、徳川氏三百年漢文章家の後勁と稱するも、決して過當にあらず。而して其の文章は、徂徠と雖も、山陽と雖も、近くは息軒と雖も、企て及ぶ可らざるものあり。蓋し先生は、單り明治の氣運中に生息したるのみならず、又た實に其の氣運の鼓吹者の一人にして、博大精深なる漢學の素養に加ふるに、醇正に庶幾き泰西學問の要素を以てし、之を陶鎔して、自ら一家を爲す。是れ其の漢文章の、徳川氏三百年間に於て、一種の特色を帯びたる所以にして、其の後世に傳ふ可き所以も、亦恐らくは此に在らむ。夫れ豈に後勁のみと謂はん哉。

頃ろ『敬字文集』世に出でたり。是れ先生が手定したる漢文にして、其の製作の年月は、安政年間より明治二十餘年に及ぶ。而して其の大部分は、明治五六年より同十五六年の間なりとす。蓋し先生の筆硯は、此の時代に於て、最も活動を極め。凡そ當時新刊の著譯書にして、先生の序言を冠せざるは、殆んど稀れなる程なりき。今や先生永眠後、十有二年を経て、此の文集に接す。恰も多年雲山萬里の外に離隔したる師友に、端なく再會するの感あり。其の大半は、吾人が熟知したる所にして、それたゞ熟知したる所なるを以て、更らに之を再讀して、無限の興懷を湛へずんばならず。若し文を以て其人を知る可しとせば、先生の文の如きは、其の適例の一ならむ。何となれば只だ一腔の眞氣、之を構成したれば也。

漢文は、概言すれば硬性を帶ぶ。之を自在に驅使して、自個の意を達

するは、非常なる素養と、或る天才とを要せずんばならず。先生の漢文を讀むに、未だ曾て一たびも、窘束の態を見ず。文字の爲めに意趣を拘泥せらるゝが如き痕跡は、先生に於ては、夢にも之を尋る能はず。さればとて潰焉として、自から放なるにあらず。其の暢達の裡に、謹嚴なる法度を寓し、其の平實の中に、老成なる波瀾を帶ぶ。乃ち漢文の専門家諸氏と雖も、先生の雍々たる大雅の音と、滾々たる長江の流とに對して、固より坐を避けざる可らざる者なくんばあらず。況んや其の内容に至りては、漢學以外若しくは以上の教養を以て、之れが成分となすに於てをや。他人は道傍の草間に彷徨するに際し、先生は高く天空に翔りつゝあり。然も先生は自から天上に翔りつゝあるを知らざるものゝ如し。

夫れ漢學者の講ずる所ろは、六經のみ、諸子のみ、韓柳歐蘇のみ。或

は程朱、或は陸王、降りて金石考證の學に過ぎず。先生は然らず、新舊約書を知り、倍根を知り、彌爾を知り、惠磨遜を知る。之を知る、必らずしも淵博ならざるも、其の精要は、會して其の眞を誤たず。其の泰西文明の真相を鑑識するに於ても、多く讀んで、何も解せざる徒と、同日の論にあらず。矧んや其の心地寛厚、性情和平にして且つ謙虚、善を擇んで、殘す所なく、釋教に及び、老莊に及び、總ての善を己に採りて、更らに吝かならざるに於てをや。此に於てか其の文章、毫も新奇を求むるに意なくして、常に清新ならざるを得ず。唯だ眞故に新なりとは、先生の文に於て之を見る。

先生が如何なる邊に、泰西文明の根原の存するを、看破したるかは、其の明治四年、泰西人に代りて、宗教自由の上奏文を、擬作したるにて、分明なりとす。

陛下其亦知西國之所以富強乎。夫富強之原。由于國多仁人勇士。仁人勇士之所以多出者。莫非由教法之信心望心愛心者。西國以教法爲精神。以此爲治化之源。匪獨此也。至于妙絕之技藝。精巧之器械。有創造者。有修改者。其勤勉忍耐之大勢力。莫一不根于教法之信望愛三德者。蓋今日西國之景象者。不過教法之華葉外茂者。而教法者實爲西國之本根內托者。貴國喜其枝葉之美。欲盡得之于己。百方試學。不惟如猿猴之爲。而願遺其所由之本根。其亦惑矣。夫心志邪則言行邪。本根邪則枝葉邪。陛下若以西國之教法爲邪耶。西國者。邪國也。西國之仁人勇士。亦邪也。妙絕之技藝。精巧之器械。亦邪也。勤勉忍耐之大勢力。亦邪也。爾來先生の基督教に關する意見は、多少の變遷ありしならんも、先生の泰西文明を、精神的方面より觀察したるは、當時に於ては、固より

卓見と謂はざるを得ず。而して宗教的、學派的論争の上に超然として、泰西精神的文明の本質を、我が國民に紹介し。之を以て我が國民を指導したるは、我が國民の最も先生に感謝せざる可らざる理由の重なる一と謂ふを以て、適當と爲す也。

吾人をして先生の所謂る成功論とも云ふ可き文字を、茲に引用せしめよ。

誠偽の二字

天下之事。不_レ止_二千萬_一。然_レ察_二其成敗得失之機_一。一_レ皆決_二于誠偽之_一二字而已矣。以發_二於國政_一。則公_一私之別也。以見_二於人品_一。則善惡之別也。以顯_二於學術_一。則邪正之別也。以著_二於工藝_一。則巧拙之別也。今夫木之大者。凌_二霄漢_一。戰_二風雨_一。蒼皮黛色。千年尙新。然溯_二其始_一。則一粒種子。託_二根于地中_一者已。川之洪者。既_二田野_一。汎_二濛濛_一。百折不_レ絕。萬挫不_レ息。然探_二其源_一。則一道活泉。空湧_二而出耳_一。是知種子者木

之誠也。活泉者川之誠也。唯其有_二是誠_一。所以成_二其大_一。物尙然。況於_レ人乎。人苟有_二一片之誠_一。存_二於胸中_一。則雖_レ如_二甚微不_レ可_レ見_一。而實爲_二萬事之根源_一。可_レ以修_二藝事_一。可_レ以植_二學識_一。可_レ以治_二民人_一。可_レ以交_二神明_一。此編曰_二勉強忍耐_一。曰_二善乘_一機會。曰_二不_レ忽_二小事_一。曰_二偶然解悟_一者。不_二一而足_一。是皆人之所_レ以成_二其業_一也。然而推_二其本_一。則不_レ外_二于一誠之發爲_一此數者而已矣。是故讀_レ書學問者。及學_二工藝_一者。當_二自問_二於己_一。曰_二果能發_二於誠心_一否。苟發_二於誠心_一矣。則自能勉強忍耐。自能善乘_二機會_一。自能不_レ忽_二小事_一。自能偶_レ然解悟。蓋有_二不_レ期_レ然而然者_一焉。呂新吾曰。才自誠出。才不_レ出_二於誠_一。算_二不_レ得_二箇才_一。誠了。自然有_レ才。今人不_レ患_二無_レ才_一。只是討_二一誠字_一不_レ得。斯言也。可_レ爲_二世間才子頂門一針_一。

是れ實に先生が、金鍼人を度するの言たるのみならず、自から實踐し

たる所も也。先生の文章の行かんと欲する所に行き、止らんと欲する所に止まり。更らに粉飾、矯術の痕なく。自然、真率、條直、明達なる所以、職として此に存せずんばあらず。所謂る『修辭立其誠』『辭達而已矣』『言有物行有恒』の三句は、先生に取りては、三位一體の本尊にして、然も之を約すれば、一誠字に外ならざる可し。吾人が先生を欽仰する、それ豈に文章のみと謂はん哉。それ豈に學問のみと謂はん哉。然も先生の文章の特色の一は、亦た實に此の眞氣人を融化する點に於て、之を見る。

概論すれば先生は、尙是れ漢學者のみ。大槻盤溪翁は、先生を稱して、三十年の漢學に、五年の洋學を加へたりと云へり。果して然らば、其の六分の五は、是れ漢學者の身分と云ふを妨げず。蓋し先生の倫敦に留學したるは、慶應三年にして、其の前年の下半期に日本を發し、其

の後年の上半期に歸朝し、滯學の時間は、一個年と數月に過ぎず。而して先生は、當時既に昌平校教官、將軍家侍講等の諸職を經來りたる、歴然たる大家にして、尋常書生の留學にあらざりき。されば泰西の學問も、畢竟漢學の臺木に接枝したるものにして、其の戸藉に於ては、漢學者に屬するを、妥當と爲す可きに似たり。而して漢學の素養に於ては、頗る淵博深厚にして、單に此の方面のみに於てしても、他の漢學者は、容易に先生に抗衡し得る者多からざる可し。

若し夫れ如何に先生が、漢學に關する知識と、見識とを有するかは、左の一文に就ても、畧ぼ之を察するに、難からず。

余嘗謂。漢土之文明。始於唐虞。中於夏殷。至子周而極其盛。乃
 矣。故勿論禮樂刑政。凡百教化之具。粲然有章。秩然有倫。乃
 至子器物之末。窮極工巧。備有法度。宜乎孔子之嘆美以爲郁

郁乎文哉也。夫孔子既嘆美周之文。而孔子之文。則最極其盛者也。雖然。孔子之文。非必皆自己出也。集唐虞三代之文。明於一己。所謂集大成者也。孔子之文。如易十翼。無不絕妙。然猶是論贊之類爾。至論語一書。則出于孔子之口。而門人錄之。唯以述而不作爲旨。而要皆發于蓄積醞釀之餘。故斷爲孔子一家之書。亦何不可哉。蓋余觀一部論語。天下之至文也。猶化工之妙。設景著色。萬象森列。四時推移。而無痕迹。雖以亞聖之雄於文。而既已不能及矣。試舉其一二。開卷第一章。不亦乎三相呼應。諄諄善誘。聖人口氣。何其溫厚和藹乃爾。道千乘一章。一句揭題。三句包五事。纍纍如貫珠。子夏問孝章。色難二字。文備意足。完然成一章。有理事弟子以下。不過補餘意。色斯舉矣。翔而後集。不言爲何物。讀至下段。方知是雌雉。絕世妙文。天

衣無縫。朱子乃疑上下必有闕文者何哉。要之鄉黨一篇。門人極力描寫。聖人聲音笑貌。躍然現出。行住坐臥。八面俱到。儀禮檀弓考工記。皆不能及焉。可知周人之文。精妙絕倫。而論語之文。則又出類拔萃者已。但以下其書極義理之精深。爲家國之要典。自古學者汲汲講其義。尙不能盡。注疏之類。千百不啻。而至于論其文者。則不一見焉。豈非可憾之甚哉。

是れ先生が、文章として論語を評したる語也。其の片言の中に於ても、先生の注々として、津涯を知る可らざる學識と、超卓なる批評眼とを見る可きにあらずや。而して是れ實に先生漢文の特色の一に數へざる可らざるものある也。

先生の序文の如きは、殆んど百科全書的にして、歴史、地理、修身、經濟、或は幾何學、字書の類に及ぶ。然も殆んど一として濫作と認む可

さものなく、其の文品に高下ありと雖も、多少の意義、興象の讀む可
きものを寓せざるはなし。先生の漢文に於ける、歐陽永叔の熱火なく
して、其の委曲紆餘の情致を得、東坡の神彩なくして、其の明快暢達
の文理を會したり。而して其の寛裕にして只だ眞理是れ愛し、其の渾
厚にして只だ善是れ好むの一事は、是れ先生の先生たる所以にして、
孔子の所謂る君子儒とは、先生に於て、其の活ける典型を見る。豈に
管だ文品のみと謂はん哉。

明治十七年の夏、記者嘗て一たび先生を礪川の邸に訪ふ。叩くに作文
の法を以てす、先生曰く他の法なし、唯文章軌範、八家文等を熟讀せ
よと。當時一介の田舎書生、固より何の思慮もなく、何となく物足ら
ぬ心地して、辭し去れり。今にして先生の文を讀む、聊か先生の自か
ら得たる所以を會したるに似たり。然も幽明相隔て、再び誨を請ふに

由なし。往事を回看すれば、茫乎として一夢の如し。先生嘗て佐藤一
齋の文集に序して曰く、

余少^{キコト}一齋先生六十歳。同以壬辰^ニ生。甫五歳。先考携^レ余。往^テ謁^ス。
先生于楊子溝之居。先生命^シ余書^シ大字。衆人環^リ視。紙積成^レ堆。先
生曰。子盍^ソ暫^ク休^ム焉。食^ニ果餌^ニ而復^シ書^ス。余掉^レ頭^ト曰。否^否。紙不^レ盡^キ不
休也。先生大賞^シ其英氣。令嗣亦光年十四。立^テ刻^シ印^ヲ以^テ賜^フ余。此余受^{ケル}
知^ル於先生之始也。既而先生年七十。起^テ爲^リ幕府儒官。住^ニ昌平學官邸^ニ。
余成童修^メ門人禮。侍^ニ講席^ニ。奉^ニ指誨^ニ。多^ク歷^ニ年所^ニ。及^ニ先生没^ス。亦光
嗣^ヲ爲^ニ儒官^ニ。余亦被^レ擢^レ擢^レ其末班。嗚呼。余之不才而得^レ至^ル此。皆先
生之賜也。

諺に曰く、小兒は大人の父なりと紙盡さざれば休めざるなりの一語、
是れ先生の本領にして、其の力行不息の精神は、一生を貫徹す。若し

仔細に之を讀まば、此の文集の如きは、亦た是れ先生自叙傳の看を做すを得可き歟。

参照 國民叢書『人物管見』君子國の眞君子

『左氏會箋』を讀む

左傳は、支那文學の寶庫也。單に其の文章の典雅簡暢にして、叙記文の軌範たるに止らず。凡そ支那上代の文明を徵するに足るものは、特に此書を以て馮據と爲す。然も吾人が左傳を愛誦するは、以上の理由に止らざる也。

蓋し左傳は、吾人に向て、故る事事實の上に、最も新らしき教訓を與ふ。史記の文、快は則ち快、然も其の叙する所、一人の英雄にあらざれば、一國若しくは一國對一國の關係に過ぎず。單り左傳に至りては、二百四十二年間に亘れる、春秋時代の歴史にして、其の關係政局の推移を描く、宛も掌上の紋波の如し。其の事最も我に遠きが如くして、實は甚だ我に近きものあり。何となれば昔日の春秋列國は、或る意味に

竹添井
々居士

於ては、我が今日の世界に於ける國際政局を縮圖したるが如き觀あれば也。温故知新の妙用、此に於てか有り。乃ち左傳を目して、經世家必携と稱するも、決して過稱と謂ふ可らず。

竹添井々居士は、好古篤學の士也。居士の文藻の超秀なるは、之を其の二十五六年前の『棧雲峽雨日記、并詩草』に就て、知るに餘りあり。其の經書に精通する者、亦た『孟子論文』等の諸篇に因りて、之を視ふ可し。然も今回其の一部分を出版せられたる『左氏會箋』に至りては、居士が彫肝鏤腎の著作にして、其の一腔熱血の産物たるを信ぜずんばあらず。是れ豈に惟り我が讀書子に惠を垂るゝと謂んや。實に我國の漢學者の爲めに、萬丈の氣焰を吐き出したるものと謂ふ可し。別言すれば文學上に於て、債務者たる吾人は、其の債權者たる支那に對して、此れが爲めに、幾分の負擔を軽くしたるの感あるを覺ゆ。

『左氏
會箋』
の特色

『左氏會箋』の特色の一は、天地間唯一の御府金澤文庫舊鈔卷子春秋經傳集解三十卷を以て、其の底本となしたるにあり。蓋し此の卷子や、建長年間音博士清原頼業の孫、助教仲隆の季子、參河守清原教隆が、其の家學の秘奥と與に、之を北條實時に授けたるもの、卷子中の奥書、歴々として之を徴す可く。且つ其の奥書によりて、其の清原家に相傳したるの、頗る遼遠なるを識る可し。而して此の卷子、實時によりて、金澤文庫に、保存せられ。後ち徳川家康の手に據りて、幸ひに其の散佚を免かれ、紅葉山文庫に、保管せられ。遂ひに今日に於て、宮内省に入りて、御物の一となりぬ。是れ蓋し六朝の遺篇にして、乃ち支那に於ても、殆んど求むるに由なき也。

請ふ吾人をして、幕府御書物奉行近藤守重の、『右文故事』を引用して、此の卷子の由來を、少しく語らしめよ。

『右文
故事』
53

左傳 卷本金澤 三十卷

左傳集解の鈔本卷子なり標褫は紺紙狹簽は白紙にして慶長以後に書するもの紫平打の紐木軸なり紙は斐紙のはなはた厚きもの毎張縦長さ九寸四分横幅一尺六寸二分繼縫僅に八厘ばかり梓痕顯として爛脱するとなしその欄界は薄墨にて長七寸一分半廣一寸界の外上下各一寸一分張別十六行ありその正文十四五字注二十一二字字體雅古みな乎古登體をつく毎卷に金澤文庫の本記ありその印は長二寸五分廣六分重廓にして金澤文庫の四字を楷書すまた長二寸四分のものあり一書を印するところ長短二様あれば當時この印二三顆ありしなるべしその佛書には朱を以て捺するなりこの印眞字端正これ越後守の創意に出るものか典雅嘉賞すべし此一印を見てもその一事苟もせざる一斑を知に足れり第一卷の尾に春秋經傳集解隱公第一とありて傍に春

金澤文
庫印

裏書

秋第一家本如此と細書し第三十の大尾に春秋卷第三十とありて傍に摺本春秋經傳集解哀下第三十とあり然れば古本此の如くの體例ありしと聞ゆ

首書裏書奥書あり古代卷子のときは必裏書ありしなり後世卷子廢れたれば西土に裏書のと聞えずその稱呼も古は何と云しにや頼長公の臺記に春秋左氏傳を讀むとを録して首付又書本書裏とあるは即首書裡書のとなり奥書は即題跋なり古へ版行の無りしときは書輒すく得べからずその傳寫の難きを以て必ずその由て來る所を登記せしなるべし後世浮靡の虛文の如にはあらずと又按に古は和漢とも書本みな鈔寫卷子なり然るに金澤文庫を設るときは宋舶載來の版本冊子少かるまじく此書の奥書を見れば保延のとき既に合摺本と見えたるに何故に是等の鉅卷みな繕寫の功を勞せしやこれ蓋し家本の傳授を尊む

て古本の體例を守りしゆへなるべし。今に於古卷子の遺製を目睹すべきものは、獨此等古本の存せるにより、千古の幸甚と云ふべし。(中畧)

皇朝古來經注本單行すこれ李唐の傳來にして舊唐志に周易十卷周易正義十卷尚書十三卷尚書正義

二十卷毛詩話訓二十卷毛詩正義四十卷と載禮記二十卷禮記正義二十卷春秋左氏傳三十卷春秋正義三十七卷と見ゆ新唐志に周易正義十六卷禮記正義七十卷杜預左氏經傳集解三十卷春秋正義三十卷とあり此金澤本のとき即是なり今江洲石山寺に現存する左傳卷本は李唐

れども未だ眞本を目睹せず恨むべし。按に佐世書目に春秋左氏傳集解卅卷春秋正義卅六卷と

見ゆ台記康治二年所見の書目に左傳三十卷抄同正義三十六卷とあり

是經注本と正義單本の別行するを見べし台記康治二年七月十一日左

傳を讀ことを録して初左傳一反云云次見正義引合本書云々其中句以

生徒可令書本書裡とある正義累要の所を抄し經注本に裏書すると云

ことありその裡書にすると云を見れば此本みな鈔寫卷本にして此金

澤本と同じきを見べきなり

『左氏會箋』は、實に此の卷子を底本とし、之を石經と宋本とに參したり。此の一事既に此書の他に比類多からざるを見る。況んや居士が、精博の學識と、公平の觀察とを以て、和漢諸大家の意見を、普搜、博采、融會、貫通して、之を出すに、自個の見解を以てしたるをや。縱令居士自個の創見は多からざるも、其の多からざる所、却て考證の信憑するに足るを觀る可し。

予は本書の何物たるを、著者其人の口を假りて、證明せんと欲す。

左氏傳之存于皇國者、以御府舊鈔卷子金澤文庫本爲最古、凡三

十卷、蓋隋唐之遺經、而音博士清原氏、世世相傳、以授于北條氏者

也、每卷有延久五年及慶德、保延、久安、仁平、久壽、保元、應保、長寛、

嘉應、治承、壽永、元曆、建曆、建保、承久、元福、延應、仁治、年間各記、

又有建長中、越後守實時、參河守教隆、正嘉中、清原直隆、文永中清原

俊隆、弘安中、左近衛將監顯時諸跋、而應永年間、山内翁怡、記其卒讀年月日于卷末、恭惟、皇國列聖相承、大敷文德、當

推古天智之盛、通使於隋唐、博徵典籍、其建學也、參取唐制、太寶學令、左傳兼用服杜二注、經筵開講、例進讀焉、則隋唐遺經之存、無足異矣、嘗攷書冊之制、三代以上用簡策、周末至漢、竹帛並用、漢魏以後、始用紙裝爲卷子、隋時秘閣書、上品紅琉璃軸、中品紺琉璃軸、下品漆軸、唐開元時、經史子集分甲乙丙丁四庫、皆寫以益州麻紙、經庫皆鈿白牙軸、黃帶紅牙籤、史庫、鈿青牙軸、縹帶綠牙籤、子庫、雕紫檀軸、紫帶碧牙籤、集庫、綠牙軸、朱帶白牙籤、此隋唐裝收卷軸之制也、廣川書跋及岳珂寶真齋法書贊並云、唐許渾、用烏絲欄、書其詩爲集、蓋用欄界卽簡策之遺意、殆肇於用帛時、而後世仍之也

故吳志孫策傳注、引江表傳云、宮崇詣闕、上師于吉所得神書於曲陽泉上、白素朱界、號太平青領道、凡百餘卷、是知用欄界遠在於六朝以前矣、凡皇國所傳舊鈔卷子本、皆用烏絲欄、而皇國讀法不常用字音、兼用義訓、或向上讀、或連下讀、故古者音博士、施朱點於字四隅及行間、以授讀法、所謂於古登點是也、卷子本左傳亦然、而木軸紫帶、紺紙裝之、猶沿隋唐之制也、唐人真本、今在皇國者、除余家漢書楊雄傳外、尾張真福寺有漢書食貨志、而田中宮相所藏喪服小記義疏、爲天平年間鈔本、亦當唐開元時、其餘世家古刹、所傳卷子、皆殆千年物、而當時音博士、仍隋唐真本施點相授、以貴傳統真本、面目絲毫不改、其零卷殘葉、亦是吉光片羽、而左傳三十卷、獨爲足本、洵絕世之寶也、試以宋本對校、文字異同不尠、而印本脫誤、可賴此補正者極多、如年首經傳二字、是始合經傳時、所題別其

在欄上、體例固當然也、開成之到于石、既無欄界、故連書之、而北宋以來、刻本皆入諸欄內、與本經無別、是誤之尤大者也、余深爲斯經之慨焉、乃以卷子本爲底本、參之石經與宋本、而經注之有異同者、加小圈于右旁、一一疏明、但注中之也等字、無關義理者、則畧焉、避其煩也、近儒之注左氏者、予所涉獵、在皇朝、則中井氏積德、增島氏固、太田氏元貞、古賀氏煜、龜井氏昱、安井氏衡、海保氏元備、皆有定說、而龜井氏最爲詳備、在清、則顧氏炎武、魏氏禧、萬氏斯同、萬氏斯大、王氏夫之、毛氏奇齡、惠氏棟、馬氏宗璉、趙氏佑、焦氏循、江氏永、顧氏棟高、雷氏學淇、方氏苞、洪氏亮吉、梁氏履繩、崔氏述、朱氏元英、段氏玉裁、王氏念孫、及引之姜氏炳璋、祁氏元、沈氏欽韓、錢氏綺、姚氏鼐、張氏自超、高氏澍然、俞氏樾、各有剏獲、去其奇僻、取其精確、其他古今諸家、論說涉左氏者、普搜博采、融會貫通、出之

以己意、名曰左氏會箋、仿杜氏集解、朱子集注之體也、而其議論、發揮大義、其考據出于獨得者、特舉名氏以表異之、亦仿朱子集注圈外之例也、夫經所以載道也、道原於人心之所同然、然則、他人說經獲我心者、道在斯可知矣、以所同然之心、求所同然之道、何必容彼我之別於其間、集衆說、折衷之、要在闡明經旨、杜朱二家解經之法、尤見其求道之誠、而秉心之公也、若夫、誇博術、新、栩栩自喜者、固不足與議、至於以掠人美爲嫌、則猶淺丈夫之心也夫、明治二十六年六月、漸卿竹添光鴻序、讀者之に因りて、『左氏會箋』の面目を、知る可し。而して吾人が最後に一言するを禁ずる能はざるは、此書の用紙、製本の清硬、質雅にして、其の印刷の鮮明なると是れ也。蓋し鑄字、印刷、特に此書の爲めに設けたるものと云ふ。乃ち其の物質的評價に於ても、此書の特色を認め

るを得可し。要するに其の書籍としての外形、亦た内容と相待つて、慙色なきに庶幾し。

予之を居士に聞く、曰く、其の本志は、論語の解釋を作るに在り。而して左傳は、孔子其人の背景として、先づ之を描かんと欲するのみと。予は居士が、近く『左氏會箋』の業を卒へて、其の志を成さんとを祈る。當今の學者、唯だ學を以て、藝となし、藝を以て、沽らんとを、是れ事とする者多し。居士の如きは然らず、病軀を抱ひて、湘南に棲遲し。利達を浮雲に比し、兀々として、經史の研鑽を事とし、以て帝國文明の天地に、貢獻する所あるを期す。是れ豈に其の學ぶ所に負かざるものにあらずや。

黄檗山の一切經

黄檗山の一切經に就て、語らんとするに際し、聊か數行若しくは數十行の閑言語を添ゆるの自由を讀者に請はんと欲す。別段語らざる可らざる必要あるにあらざれども、當時の情景、今尙ほ髣髴として、眼前を離るゝ能はざれば也。

記者は頃ろ京畿漫遊の折を以て、友人一兩と相拉さへ、宇治に遊べり。宇治の勝地たる、今更ら説く迄もなし。予等が晚來京都より奈良鐵道に乗じて、宇治驛に下り、萬碧樓に投宿したりしは、既に初夜なりき。樓は宇治川の左岸に枕み、特に予等の占めたる室は、頼襄が萬碧樓の三字を楣間に掲げたる、最も水に近き一なりき。水烟微茫唯だ向岸の燈火、風に亂されて明又た滅するのみ。湍流の潺々たり、淙々たり、

而して又た奔雷の如く、車輪を轉ずるが如く、急雨の如く、大海波濤の聲の如きは、蓋し激する所の大小遠近、同じからざるが爲めなる可し。予は一夕の水聲に、十年塵土の腸を洗ひたるを多謝せずんばあらず。幽夢水石を迎るの最中に、月出たり、月出たりと耳邊に私語するものあり。睡眼を摩しつゝ、起て欄干に倚れば、同行の一友は、乍ち予に向つて彼方を指點したり。看來れば半片の殘月は、恰も朝日山の端に含まれたり。峽霧薄紗の如く、兩岸の青山睡るに似たり。四顧寥落、唯だ奔湍の響、獨り息まざるのみ。所謂る逝く者は、此の如く、晝夜を捨てざるもの乎。嗚呼、予は端なく、杜少陵の『四更山吐月。殘夜水明樓』の實物教育に接するを得たり。誰れか古人の句を、假構なりと謂ふものぞ。

遊黄檗に

翌日を以て、宇治の諸勝を巡覽し、遂に黄檗に及べり。予等は小舟に

四更山
曉月

見時容
易到時
難なり

乗じて、宇治川を下り、火薬製造所附近より上陸し、田園、村落を横ざり、黄檗山に向ひぬ。舟中より見れば、指顧の間なれども、歩行すれば随分難儀也。殘暑人に迫り、苦熱堪へ難し。予等は確かに隱元和尚の『見時容易到時難』の句を實驗しつゝありき。黄檗山は、宇治に於ては、勝景の一たるに係らず、寧ろ最新の經營に屬す。火薬庫を除き、宇治鐵橋を除けば。夫れ菟道の地たる、仁徳天皇に位を譲りて、自から逝き給ひたる稚郎子尊を以て、史上に現はれ。降りて平等院の鳳凰殿の如き、千有餘年の造營物儼然として猶ほ存す。更らに降りて賴政の末路、佐々木梶原の宇治川先陣、何れも入口に膾炙せざるはなし。若し其の年代を以て誇らば、黄檗山の如きは、殆んど顔色なかる可し。何となれば開山隱元和尚は、明末清初の支那僧にして、其の開基は寛文元年即ち今を距る二百四十餘年に過ぎざれば也。然も黄檗山は、凡

隱元和
尚

刹にあらず、隱元亦た俗僧にあらず。彼が福州より海に航して、我國に來るの舟中に於ける、

萬頃滄浪堪濯足。一輪明月照禪心。
可憐八百諸侯國。未必完全得到今。

の偈を誦すれば、彼が濟生の抱負は、決して尋常ならざるを想ひ見るに餘りある可し。

予等は山門の前、青田に面したる蕢張の茶店にて暫時玉なす汗を拭ひ、各個の石片より火炎を吐くかと思はるゝ如く熱したる石段を踏んで、山門に入り縦覽なしぬ。境内四萬三千餘坪、建物二十餘棟、殆んど二千餘坪に達す。朱閣、白壁、庭上の青松と相ひ映帶して、自然の配色を爲す。亦た來り見るを悔ゆ可らざる也。然も吾人が最重の感觸は、其の一切經にある也。嚴に言へは一切經板を經設したる鐵眼和尚の善

最重の
感觸

根にある也。

予等は見ると見盡たれば、寺僧に案内して、何ぞ寶物にても、展覽するを許さざるやと請しに。寺僧は別に此れと申すものなし、唯だ一切經板ありとて、法堂の後に伴ひ、之を示しぬ。六萬枚の一切經板木は、廣徹なる大厦に、架を連ねて、悉く之を藏めたり。而して其の側には、三四の摺手頻りに之を印行しつゝあり。是れ必ずしも奇とす可きにあらず。予が語らんと欲するは、其の板の來歴にあり。

元來此の一切經板木は、黃檗山二代の木菴和尚の法子、鐵眼禪師の經設に成りたるものなりと云ふ。禪師惟らく我國は、佛國とも稱せられ、伽藍、佛像一として具備せざるなきに係らず、單り一切經の板木なきは、如何にも遺憾の至りなれば、是非共之を出來す可しとの大誓願を起し。百方奔走して淨財を集め、既に其功を創めんとするに及び、恰

一切經
板木

大なる
心と猛
き志

も延寶年間の大饑饉に際したれば、悉く其の財を投じて、窮民を賑はすと、前後二回。然も其の初志を屈せず、三回目の勸化によりて、遂ひに其の功を果たすを得たりと云ふ。

予は如上の來歴を聞きて、實に我が同胞に對する尊敬の念を生ずるを禁ずる能はず。予は日本國民にも、此の如き大なる心と、猛き志とを有する人ありしかと思へば、何となく自から心強くなるを覺へずんばあらず。千辛萬苦、淨財を集めて、一切經を刊行す。或は之を能くす可し。然も其の緣募金を携へ、市門に立ち、飢色ある者に向つて、悉く之を施す。それ豈に容易の業ならんや。之を施す或は能す可し。再び募り再び施す、それ豈に常人の倣し得る所ならんや。然も其の二たび施し、三たび募りて其の初志を成すが如き、試に身を此の境に處せば、其の最も企て及ぶ可らざるを知む。此の猛志あるものは、此の大

國途の
前途に
向つて
失望す
べから
ざるを
知る

心なく、此の大心あるものは、此の猛志なし。吾人は一切經刊行の功德の、幾許なるを知らず。然も其の功德の大小の如きは、吾人が必ずしも計較を必要とする所にあらず。吾人は唯だ此の如き人間の、我が日本國民より出で來りたるを見て、濫りに我が國民の前途に向つて、失望す可らざるを知るのみ。

讀者よ予の語る所、此に止まる。此の物語りより如何なる教訓を拾ひ來るかは、一に諸君の心に存す。然り、一に諸君の心に存す。

予等は當日の午後、宇治より奈良に向て去れり。予は萬碧樓上の殘月よりも、鳳凰殿の古色よりも、宇治川峽の朝霧よりも、宇治川の沿岸に連りたる、質素にして風雅なる水車よりも、今尙ほ黃檗山の一切經板に向つて、眷戀たらざる能はざるものあり。苟も斯の心志あり、以て天下を濟ふに餘りあらざらんや。

『一年有半』

『一年有半』は、明治の逸民、中江兆民君が、死後の形見に残さんが爲めに、病苦を犯して著作したるものにして、門人の請によりて、之を生前に發行したるもの也。今春君が癌腫の病に罹るや、君亦た其の不治の症たるを覺り、之を醫に諮る、醫曰く一年半、善く養生すれば、二年を保す可しと。是れ書名の因て來る所にして、君が此の『壽命の豊年』を利用して、斯書を著作したるの心事、亦た悲しからずや。

兆民君が文士として、明治の社會に、一の異彩を放ちたるとは、何人に於ても異論なし。其の佛蘭西文字の知識に加ふるに、漢學の素養ある、乃ち漢學者として、門戸を張るも、優に一家を成すに足るものあり。其の人事、學事に對する與會の多角的にして、著眼の非凡なる、

其の意見は、必ずしも悉く讀者を首肯せしむるに到らざるも、亦た必ず多少の諷刺、多少の刺戟、多少の啓發を感得せしむるを禁ずる能はざるものあり。之を君が十五年前の著述『三醉人經綸問答』に徴して然り、『佛國革命前二世紀事』に徴して然り。況んや其の最終の——吾人は斯く希望せざるも——著述、即ち著者が自から託して、眞我を揮揮したりとする斯書に於てをや。宜べなり斯書一たび出で、乍ち讀書社會を震動したるや。吾人は明治の社會が、著者に對して、決して薄恩ならざるを信ず。

世上往々兆民君を以て、東洋のルソと爲す。然も記者は何の點に於て、其の近似の性格あるかを解するに苦しむ。暫らく記者の見る所を以てすれば、兆民君は、ルソの天才なきと同時に、亦た其の狂氣なし。人或は兆民君を以て、明治の奇人と爲す、然も記者に於ては、毫

も其の奇たる所以を知る能はず。記者の眼中に映ずる兆民君は、立派なる學者なり、才學尋常に秀で、志向庸俗に同じからず。而して世人が君を所謂る奇人視したる所以は何ぞや。願ふに君が言行の驚世駭俗を旨とし、往々にして繩檢の外に慕したるが爲めにあらざるなきを得んや。然も是れ皮相のみ、若し其の外皮を剥ぎ來らば、君は小心翼翼たる、一個の多血多情の學者のみ。

『一年有半』

『一年有半』には、随分思ひ切りて、世を罵り、人を詈りたる文句あり。されど何となく其の毒々敷憎氣なし。若し仔細に讀み來らば、應さに斯く思ふべし、曰く著者は果して眞に斯く信じて、斯る言をなすや否やと。忌憚なく言へば、吾人は著者が何故に斯る柄に似合はざる藝を演じたるかを異まざるを得ず。君は到底敵役たる能はず、君は敵役たるには、餘りに好人物なり。

利害に明に
暗に義に

されば其の眞面目なる部分には、頗る有益なる意見あり。特に左に掲ぐる一節の如きは、我が國民の弱點を穿らたる高論にして、恰も明識の君子の意見を道破したるものに似たり。

我邦人は利害に明にして理義に暗らし、事に従ふとを好みて考ふるを好まず、夫れ唯考ふることを好まず、故に天下の最明白なる道理にして、之を放過して曾て怪まず、永年封建制度を甘受し士人の跋扈に任じて、所謂切棄御免の暴に遭ふも曾て抗争することを爲さざりし所以の者、正に其考ふることに無きに坐するのみ、夫れ唯考ふることを好まず、故に凡そ其爲す所、淺薄にして、十二分の處所に透徹すること能はず、今後に要する所は、豪傑的偉人よりも哲學的偉人を得るに在り

又た曰く

新聞記者の口吻もて言へば、我邦には口の人、手の人多くして腦の人寡し、明治中興の初より口の人と手の人と相共に蠢動して、其所謂進取の業を開張し來れること茲に三十餘年にして、首尾能く今日の腐敗墮落の一社會を建成せり、我日本人民何の天に罪か有る是れ亦た一理ある見解也。

又た曰く、邦人特性和易にして放漫に流れ易く、坦率にして狎瀆に陥り易し、嚴毅と莊重とは其短とする所也、局に教育に當る者、當に眼を着くる所有る可し

實に然り、然も平生酒を使ひ座を罵り、眼中に王侯貴人なかりし兆民君の口より、此言を聞かんとは、何人も思ひ設けざりし所なる可し。然も君が眞面目は、却て此に存す。放言豪語、鬼面人を嚇するは、君

の本領にあらず。如何に慣習の久しき、第二の天性たらんとするも。尙ほ小心翼翼の本性は、覺へず發露し、却て禮儀を説き、作法を説き、服制を説き、秩序を説くに到らしむる也。

書中人物の評論多し、然も動もすれば往々透徹を缺く所あり。其の西郷侯を目して怯懦となすが如きは、蓋し大ひなる見當違ひなる可し。記者の見る所を以てすれば、西郷侯の長所は、大難大疑に際して、決然たるにあり。言ひ換れば怯懦ならざるにあり。之を除けば、西郷侯は凡夫のみ、而して之を稱して、怯懦と爲すは何ぞや。

若しそれ西園寺侯を論じて、

西園寺侯、氣宇高亮、識見宏遠にして、加ふるに聰明匹儔なし。但其甚だ聰明にして、一切事に於て直に輒ち其着落の處を透觀するが爲めに、一も侯の好奇心を動すに足る莫し、即ち天下如何なる事も

侯に於ては始より奇なる莫し、即ち此侯や好奇心有る無し、是れ其冷々然として些の内熱無くして、其丰采に接し其言語を聴く者をして、亦皆其内熱を冷却し去らしむる所以也、

に到りては、殆んど六分の眞を描きたるもの。但だ憾らくは君や十年前の西園寺侯を知りて、現今の西園寺侯を知らざるを。若し政友會の創立以來、伊藤内閣の組織及び其の没落前後に於ける侯の動作を觀察するとあらば、君の西園寺侯に於ける評論は、少くとも其の一半を更正したらんも、未だ知る可らず。

著者の
本領と
眞我

之を要するに、著者は『一年有半』を以て、其の本領、其の眞我、此に存すると爲せども。記者の見る所を以てすれば、斯書は僅かに著者の一斑を現したるものにして、未だ著者其人を盡したりと謂ふを得ず。約言すれば著者は著書よりも、品格に於て高く、人物に於て愛好す可

きものあり。著者は眞面目の人也、常識の人也、夫として其の妻に眞實に、父として其子に慈愛に、友として其の交る所に忠なる人也。但だ皮下餘りに血熱し、眼底餘りに涙多く、腹黒さが如くにして、極めて初心に、面皮硬さに似て、頗る薄く、自から濁世の風波に觸るゝに堪へざる身を以て、強ひて之を凌がんと欲して克はず。爲めに、時に酒を假り、時に奇言奇行を藉り、以て其の自から世と容れざる悶を排せんと試みたるのみ。而して世人往々假を以て眞と爲し、眞に君を奇人視するに到る、是れ豈に君の知己なりと謂はん哉。

實際の
經綸

君や文士なれども、其の志亦た實際の經綸に存したり。君の畢生の希望は、實に薩長政府を斃すにありたるが如し。其の第一議會に於て、當時の土佐派が、政府と調停し、六百萬圓減額の交讓案成るや、君は憤然『無血蟲』の一文を草して、其の同志の反覆を痛罵したりき。第

二議會前後、大隈、板垣兩伯の握手の如きは、實に君が冥々裡の幹旋與りて力ありき。惟ふに當時民黨吏黨の語は、君が新鑄したる熟字にして、實に政界に最も有力なる合言葉たりき。然も自由黨、改進黨の睽離は、君の宿志をして、遂に蹉跎たらしめぬ。此に於てか、政治上に於ては、君は全く失望者となりぬ。

爾來文士亦た自立の計を爲す可きを悟り、自から文筆を抛ち、牙籌を把り、飲を絶ち、行を謹み、頓に別人となり、以て兀々として其の産を治めたれども。天は君を以て、富家の翁たらしむるを欲せず。即ち君の言を以て、説明すれば、

余の事業に於けるや、贏利は則ち他人之を取り、損失は則ち余之れに任し、其未や裁判、辯護士、執達吏、公賣等續々生起し來りて後ち已む、是れ余が數年來事業に従ふて遭遇せし所の境界の順序なり

天は富家の翁をたらしむるを欲せず

この経過にて、再び文壇に返りし間もなく、不治の症に罹り、終に斯書を藉りて、其の幽懷を叙しぬ。天の才人に厄する、一に何んぞ此に到るや。然も君が文筆に堪能にして、世渡りの術に拙なるもの、未だ以て君の病となすに足らず。それ君と同時に學び、若しくは君に隨ふて學びたる人士にして、其の世俗的成功の人となりたるもの、何んぞ一二を限らんや。惟ふに君に於て彼等を見れば、刀癡遍體身長廢。部下偏裨萬戶侯の感なきにあらざる可し。然も君が本領は、却て世渡り術の拙にあるやも、未だ知る可からず。

最後に轉載せずして已む能はざるは、君が夫妻相携へて、堺濱を逍遙したる一節也。

堺市、濱寺風景甚佳なり、海濱松樹亂立して、其下縱横歩行して涼を取る可く、大に須磨及び東海道中、平塚に似たる有り、海汀一酒

心事眞
可し悲む

肆旅館を兼ねる者一力と云ふ、構築頗る宏壯、欄に倚りて一望すれば、水天髣髴の際、神戸及淡路を看取するを得、余一夕妻と俱に歩いて海汀に至る、遇ま天雨を催し、黒雲西方を蔽ひ波浪岸を拍ち、鞞鞞の聲、人をして或は意氣壯ならしめ或は悽然哀を催さしむ、余既に不治の疾を獲て所謂一半年の宣告を受けて、而して妻日夜余に侍して藥餌の勞を取るも、是れ固より治癒を求むるに非ずして、唯死期を待つのみ。余や男子、且つ頗る書を読み理義を解する者、箇中又自ら樂地有りて、時々大疾の身に在るを忘るゝに至る、妻の如きは女性、近來頗る余の薰化を受け快を目前に取るの術を得る有りとも雖も、而かも余の如く自得悠揚たる能はざるは自然の道理也。余固より産を治するに拙にして家に逋債有りて貯財無し、而して斯重症に罹る、悲惨と云はゞ悲惨なり、此夕余笑ふて妻に謂て曰く、卿

余死したる後ち復た再嫁の望有るに非ず余と俱に水に投じて直ちに無事の郷に赴かん乎何如と、兩人哄笑し、途中南瓜一顆杏果一籠を買ふて寓に歸る夜正に九時

文章此に到りて、泣かんと欲して、泣く能はざらしむ。以て君が文品を見る可く、亦た以て君が人品を見る可し。君や死生存亡、愛別離苦の際に於て、堅忍のストイックたらず、却て和易のニヒユキリアンを以て、自から擬せんとす。乾涙の悲は、熱涙の悲より悲し。笑裡の苦慘は、血泣の比にあらず。讀んで此に到り、著者を知らざるも、尙ほ情に堪へざる可し、況んや著者を知る者に於てをや。

泣かんと欲し
泣く能はざらむ

『成功論』を讀む

如何に
功すべ
き乎

如何にして成功す可き乎、塚越停春君の新著『成功論』は、之に向て解答を與へんと試みたるもの也。記者は此書を一讀し、其の解答の頗る穩正にして平實なるを見たり。著者は自ら詫して其の議する所、概して英雄教育に在りと爲せども、吾人は通常の市民教育として、亦頗る有益なるを見る也。蓋し英雄も凡人も、概して謂へば、其の種類を殊にするよりも、寧ろ僅かに程度の差に止まるに過ぎず、別言すれば英雄は、畢竟凡人の發達したる者なれば也。

成功の
要目

著者は成功の要目として、自主、健康、大志、教育、剛毅、勤勉、秩序、廉直、儉素、安心、鑒識、雅量、信義等を擧げ、各項に就て説明を與へたり。此等の部門は、寧ろ煩屑に失せざる乎、其の順序は、寧

此書の
長所

ろ專恣ならざるなき乎。即ち更らに論理的秩序を趁ひ、其の部門を更へ、順序を正しふするの必要なき乎。是れ吾人が最初に生じたる意見なり。然も若し此の一冊を一文章として通讀すれば、著者立言の主意は、自から全章に貫串し、毫も遺憾なきを覺ゆ。吾人は必ずしも其の結構剪裁に就て、小疵を指摘するの要なかる可し。然りと雖も此書の長所は、如何にして成功す可き乎を、道理の上より説きたるよりも、事實の上に於て明らかにしたるにあり。更に長所とす可きは、其の實例を最も多く我が國民の先覺に求めたるにあり。蓋し著者は國史に於て、專攻する所あり、加ふるに其の記憶精明にして、探討に餘力を剩さず。其の類例の手に應じて出で來る、決して偶然にあらず。吾人は此點に於て、此書の眞價を評定するの至當なるを疑ふ能はず。

著者が徳川家康の儉素なるを記し、其の廐の損じたるを、加々爪隼人が、改造せんと請ひしに答へて、雨漏らば漏る所ばかり改めよ、壁壞れなば壞れたる所ばかり補へよと謂ふに到り。實に徳川氏三百年の天下は、此の堅固にして質實なる裡より出で來りたるを識る也。儉素と謂ひ、勤勉と謂ひ、秩序と謂ひ、剛毅と謂ひ、大志と謂ひ、自主と謂ふ。其の名目は異なれども、其の實は一のみ。

成功は幸運、若しくは智術よりも、寧ろ多く品性に歸するとは、東西古今識者の異論なき所なり。羅馬が世界の征伐者たりしも、其の質直剛銳にして、義務の觀念、遵法的精神の横溢したるによる。徳川氏の天下を取りたる、亦其の重なる原因の一は、參河武士の義を見て勇みし精神によらずんばならず。國家、若くは團體にして此の如くんば、個人に於て亦然り、否最も然らざるを得ざる也。

人或は曰く彼は悪人なるが爲めに成功したり、彼は善人なるが爲めに失敗したりと。時としては善其物が、浮世の運命に於ては、失敗の原因たるが如く、悪其物が成功の原因たらずとも謂ひ難し。然も是れ決して定例と爲す可からず。請ふ仔細に點檢せしめよ、所謂る悪人の成功は、果して其の惡によりて成功したる乎。將た彼か賤惡す可き行徑あるに係らず、亦た一種の猛志硬行によりて然るなき乎。悪人と稱せられたりとして、徹上徹下純惡の分子のみと速了す可からず。抑も亦所謂る善人の失敗なるものは、果して善徳の故を以て然る乎。將た善人とても純善なる可きにあらず、必ずや彼の善徳に伴ふ多少の弱點あり、其の弱點即ち失敗の原因たらざるなき乎。世の所謂る君子なるものは、時としては薄志弱行の徒の代名詞たらざるなき乎。是れ豈に吾人が分別を要する所たるなからん哉。

吾人は支那の歴史に於て、屢ば君子と小人との争なるものを見たり。第一の疑問は君子果して君子なる乎、小人果して小人なる乎にあり。假りに然りとなすも、彼の所謂る君子なるものは、正論を唱へつゝも、自から實行の責任を擔當するの勇氣と、辛抱力とを缺き、徒らに口舌の英雄として了るもの滔々是なりと爲す。之に反して小人なるものは、往々自から玉石俱に焚くの覺悟を有し、敢て畏避せず、悍然として所志を斷行して顧みず。果然小人の成功は、其の猛志堅行にあるが如く、君子の失敗は其の薄志弱行による也。

吾人は實に正善の力の雄大なるを認めずんばならず。乃ち道義の原則に於て容る可からざる目的を達するにさへ、其の不正善なる目的を達するにさへ、正善なる手段によりて、成功するもの、多きを認めずんばならず。即ち姦雄の其の姦を逞ふるは、其の姦惡の手段にあらず

して、却て其の人を服し民を懐くるに足るの良好なる手段に憑るを認めずんばならず。それ成功したる強盜さへも、其の徳望は以て、群盜の魁たるものあるが爲にあらずや。人或は正直を以て成功の迂路と爲し、狡獪を以て成功の捷徑と爲す、是れ皮相の見のみ。

吾人が此書に就て、聊か不足を感ずるは、成功其物に就て説く所なきと是れ也。吾人は如何にして成功す可き乎の問題に先んじて、何をか成功と謂ふかの概念を明白ならしむるの必要なき乎。將た如何なる成功を期待す可きかの問題を解決するの必要なき乎。著者が書中に歴舉したる中に於て、例せば吉田松陰の如き、佐久間象山の如き、横井小楠の如き、何れも其の志の大半を齎らして逝きたる者にして、世俗の所謂る成功其物の解釋によれば、寧ろ失敗の部類に入る可き人にあらざるなき乎。若しそれ古來の大聖たる孔夫子の如き、陳蔡の間に厄せ

られ、^{ソクラテス}瑣^{ラス}の如き、毒盃を傾け、基督の如き十字架に上りたる者、世俗の所謂る失敗者として、誰れか彼等に若くものあらんや。然も彼等は天上の北斗星の如く、今に到る迄、世界萬人の仰ぐ所たるは何ぞや。吾人は成功に向て、一身を捧ぐるに際し、先づ成功其物に就て知る所あるを要す。

概して言へば、或る目的を立て、之に達するは則ち成功也。金持たらんと欲して、金持となりたるは、其人に取りては成功也。大臣たらんと欲して、大臣となりたるは、其人に取りては成功也。若しくは當初より大なる目的を立てざる迄も、其の卑き階段より、高きに達するは、則ち成功者として、社會は之を待遇す。然も如何なる成功にても、成功さへすれば可なる乎。如何なる手段にても、成功にさへ達すれば可なる乎。是れ商量を要す。

惟ふに人生の成功とは、人生の生活の意義を最も圓滿に達したるを意味す。生活の意義とは、吾人の能力を最も完全に發達せしめ、最も有効に人類の爲めに使用するを謂ふ。果して然らば成敗の鑑定は、人にあらずして我にあり。苟も我が心に疚しからずんば、世を擧げて失敗したりと謂ふも、我に於て何かあらむ。此の如き見解よりすれば、著者が列擧したる佐久間、横井、若しくは吉田松陰の如きも、亦た成功に近きものと爲す可き歟。若しそれ成功の定義上述の如しとせば、彼の不正の手段によりて顯達し、若しくは僥倖に乗じたる徒の如きは、馬背に貼して奔りたる蠅の如く、寧ろ甚だ賤しむ可きを見る也。切言すれば是れ鄙夫の爲のみ、丈夫兒の業にあらず。所謂る玉碎するも、瓦全を愧づとは、此の消息を意味す。

吾人は聊か著者の未だ言ふに遑まあらざる點に就て、蛇足を添ゆると

此の如し。知らず果して著者の意を得たるや否や。若しそれスマイル
ス氏の自助論を以て、西國立志編と稱す可くんば、著者の『成功論』は、
日本立志編たるの名に於て、決して適當ならざる可し。

成功は目的にあらず、結果也。

明治三十八年 五月十一日

記

者

『透谷全集』を讀む

透谷全集は、明治の詩人たる可かりし、北村透谷君の早折を悼み。其
の愛惜す可き名残を、世に留めんとて、彼の友人等が編纂したる遺稿
也。記者は之を瞥讀する當初に於ては、此書に就ては、何言をも語らざ
る積りなりき。何となれば記者は君と交ると淺く、知ると淺く、而し
て君が樂みを樂み、君が悲を悲むが如き、精神的同情の寧ろ多からざ
ることを知りたれば也。既に其人に深交なく、復た其の精神的共通を缺
くに於ては。如何に好意を以てするも、其の人物、若しくは其の製作
物に就て、遺憾なき正義を竭すとは、到底期す可らざることを知りたれ
ば也。然も讀み去り讀み來るに従ひ、君が面影は、鬚髯として行間に
現はれ、覺へず予をして、嗟嘆の聲を漏らすを禁ずる能はざらしむる

ものあり。

本書中にて最も多く君を説明したるは、其の石阪嬢に與へたる書翰と、
 嚴君に呈したる書翰となる可し。前者は君が自叙傳にして、後者は
 君が懺悔録の看を倣すも、亦た妨げざるに似たり。然も予は之れを一
 讀して、實に意外の感なき能はず。君は其の成立の境遇を以て、甚だ
 不幸の境遇となしたるもの、如し。然も其の語る所を聞けば、殆んど
 十人の中七八人迄は、有り勝ちの境遇にして、其の此れが爲めに、君
 の一生に制裁す可らざる厭世的性情を作り、遂ひに此れが爲めに自か
 ら逝きたるが如きは、常識の能く解する所にあらず。それ嚴重なる祖
 父、無頓着なる祖母、何の家庭にか、是れなからざらむ。君は其の父
 君をば傲慢磊落と評し、其の母君をば、極めて甚だしき神経質なりと
 評したれども。假りに君の觀察の如しとするも、此れとて必らずしも異

常とするに足らず。此れが爲めに、其の一生を犠牲にせねばならぬ程
 の因縁を生じたる理由は、萬々是れある可らず。此に於てか君の家庭
 觀なるものは、其の半は主觀的の觀察にして、君を厄したる者は、家
 庭にあらず、境遇にあらず。所謂る君自身即ち君の仇たりしとを疑ふ
 能はず。其の自身と謂ふは、立ち入りて吟味すれば、君の才情實に君
 を厄したりと謂ふを以て、允當と爲す可きが如し。

想ふに君は才情濃かにして、神經過敏に、志望高く且つ多くして、理
 性、意力或は少しく之に伴はざるものありしならむ。されば常人の眼
 に於ては、尋常の事も、君に於ては、非常の事たりしなる可く。常人
 に於ては、齒牙にも掛けざる事も、君に於ては、驚心駭魄の事たりし
 ともある可く。君は常人の踏み込む能はざる、天地の秘密に踏み込み
 たるも、未だ知る可らずと雖も。常人の喫せざりし、人生の苦味も、

或は満盞に之を喫したるなる可し。果して然らば天才狂に近しとは、君に於ては無意義の矯言として、之を排す可らざる也。

君は果して詩人たるの詞藻、音調を有したるや否や。記者は之を評論す可き権理を要求せず。然も其の詩人たるの性情、詩人たるの靈性に到りては明治の文壇、君に於て特に其人を見ると斷するも、過當にあらず。君の精神は活動を好み、自由を求めたり、無窮を趁へり。詩人の血は、君の血管に湧けり。彼は到底情的文人たるを脱する能はざりしも、決して陋劣にして、利己的なる泣蟲にあらず。其の高情は、以て鬼神に質す可く。其の熱感は、以て天地に訴ふ可し。君の箭は、天に達せざる迄も、君は決して天に向て射るとを忘れず。君の思想の健全なるや否やは、今日の問題にあらず。但た特に表彰す可きは、其の思想の、君が所謂『純美を尋ね、純理を探る、世の詩人たり、學者

たる者、優に地平線的思想家の預り知らざる所に於て、人類の大目的を成就』せんと欲するの高所に存し、而して自から勇往して顧みざりし一事是れのみ。

本書の開卷の數篇、即ち其の論議、時評の重なる部分は、直接、間接に、我が同人と、君等との間に於ける論戰の名残にして。吾人は君等を目して、高踏派となし、君等は吾人を目して、地平線的思想家となし。前者の勇將は君其人にして、後者の勇將は、山路愛山氏たり。兩人互ひに莫逆にして、然も其の論戰頗る力めたり。予は今日に於ても、君の思想、及び趣味に對して、大いなる同情を表す可き自由を有せざれども、それたい君を透して、君の議論を聽けば、何となく耳に近き心地せずんばならず。古人は人を以て言を廢す可らずと謂ひしも、吾人は寧ろ言を以て、人を廢す可らずと謂はんとす。十年一夢の如し、

美質は
愛好すは
ざるを禁
ずる能はず

今にして之を追想すれば、殆ど懐に勝へざるものあり。記者は自から君の友人たる可き資格あるや否やを疑ふ。本書にある君の日記を閲すれば、記者が君と始めて相見たるは、明治二十五年九月にして。而して君は二十七年五月を以て、既に他界に旅行したり。此の僅々たる歳月中、互に相見るの期、甚だ多からず。而して君が思想の領土の三分の二は、予に於ては未觸の地にして、單に其の同情の缺乏したるのみならず、亦た君を文士として評値す可き理解さへ不足なるが如し。然も君の美質は、記者の不敏を以てするも、尙ほ之を愛好するを禁ずる能はざるものあり。君は自から『生の神経の過敏なる悪質は、之を母より受け、傲慢不羈なる性は、之を父よりもらひたり』と語りたれども。君は其の以上に、尙ほ一種純粹なる美質の存したるを自覺したるや否や。予は嘗て、より多く君を知れる愛山氏に語り

美質よ
る來幸
る不幸

て曰く、透谷子は、餘りに純粹なり、是れ自から消磨したる所以にあらざるなき乎。世に通用せしめんには、金貨さへも、他の鑛質を加味するにあらずやと。若し君の不幸は、君の缺點よりも、寧ろ君の美質より來りたりと知らば、如何に鐵石の心腸を以て自から居る男兒も、焉んぞ君の爲めに、一掬の哀涙を迸しり出さずして止まん哉。

『湘烟日記』を讀む

明治十五六年の頃にやあらむ。記者銀杏城下の村塾に主たりし當時、岸田俊子てふ、一個の婦人演説家、熊本に來れり。頗る市中の評判物となり、中には眞面目に感心したる者も尠からず。記者の先輩の一人は記者に向て、何故に彼女を訪問せざるやと、其の疎慢を咎めたる者さへありき。然も記者は訪問せざりしのみならず、其の有名なる演説さへも、聽聞せざりき。其の機會なきにあらざりしも、自から之を捉へざりしが爲めのみ。

明治十九年の晩、若しくは二十年の初め、記者は中島信行男を、九段招魂祠畔の家に訪ひ、始めて其の夫人に紹介せられたり。而して其の夫人とは則ち三四年前の女辯士たるとは、記者も既に熟知したる所にし

て。其の前半の生涯に於ては、記者も不精確ながらも、多少の知識なきにあらざりき。然も記者は唯だ寒暄を叙したるのみにして、遂ひに中島夫人の高論に接する能はざりき。蓋し記者自から驅いて求めざりしが爲めのみ。

頃ろ所謂『湘烟日記』なるものを讀み、始めて中島信行君が、彼が如く其の夫人に傾倒したるの偶然にあらざりしことを感じたり。惟ふに一切の乗除をなすも、湘烟女史の如きは、明治年代の婦人としては、先づ水平以上の一人と云はざるを得ざる可し。單に詞藻の上のみならず、其の智識の上に於て、其の教養の上に於て、決して平凡ならず、又た平凡なる能はざるものあり。特に其の批評眼の深酷、精細なるは、婦人として愛好す可き分量を、痛く滅殺したるに係らず。其の平凡ならざるを證するには、餘りあるものゝ如し。

湘烟日記の主體は、明治三十四年三月十九日より五月廿日に至る迄の、日誌にして。女史が其の廿四日に、永眠したるよりすれば、其の最後の記録と云ふを得可し。惟ふに重病侵尋、臥室と坐敷との往來も、殆んど太平洋航海よりも面倒なる日に於て、其の日々の記事は、殆んど新聞社説の一日分を埋むるに足るが如きものあるを見れば、女史の氣力の、最後迄持續せられ。其の精神の、肉體の衰弱に係らず、彈力を有したるとは、分明なりと謂ふ可し。

女史は果して何の爲めに、此の如き日記を書きたる乎。只だ日課として、且つは消閑排悶の爲めに。自から讀んで楽しむ爲めに、而して母上の之を讀むを好み給ふが爲めに、然したりと云へり。されば果して女史の言を信ず可しとせば、之を世に公にするの意なきのみならず、又た公にするを欲せざりしや知る可し。然も書中の所記を熟讀すれば、

何の爲に此の日記を書きたる乎

遺稿委託の例

或は見る可き人に見て貰ひたき之感、絶無と云ふ可らざるに似たり。吾人は此の日記の出版を以て、必らずしも女史の信託を壞りたるものと謂はず。或は艸葉の蔭よりは、寧ろ吾が心を獲たりと云はんも、未だ知る可らず。但だ憾らくは、編纂者其の人を得ず、爲めに書中の記事の、讀者に興味を添ゆる丈、それ丈女史の徳を煩はすものありと。是れ決して女史を咎む可らず、若し咎む可しとせば、其の遺稿の委託者、其人に就て、周到なる遺言をなさざりしと是れのみ。遺稿の委託、其人を得ざりし爲めに、死者の徳を煩はしたるもの、其例甚だ少しとせず。文豪カトライルの如き、大僧正マンニングの如き、概ね然らざるはなし。然も遺稿の編纂者が、忠實に、周到に、丁寧な、死者をして悔恨せしめざるの用意を盡すは、死者に對する徳義上の責任と云はざるを得ず。他人胸中の秘密を、商品と爲すが如きは、不人

情も亦た甚だしからずや。吾人は此書に就いて、斯く非難す可き點を見出さず。されど人事の有形、無形を論せず、殆んど商品化せんとするの今日に於いては、特に此點に警戒するの必要あるを見る。

日記中に、特に發揮せられたる一は、女史の意志の硬固なること是れ也。要するに女史は、死生の岐に立つとも、其の平生の精神を失はざりしのみならず、寧ろ死に反動して、愈よ其の反撥力を加へたりしもの如し。

世の中自暴自棄に過るものは評するまでもなけれど、又身輕でやすくと渡られる世界を無理に重荷を着けて苦しむこそ氣の毒なれ。自分にわたらねば渡たれぬやうに思ふは已に重荷のひとつなり。聊かも氣を勞せずとも春來り夢去り秋動き冬窮りなどして、ずん／＼と變化してゆくなり。この變化に伴はれて、いやといふとも應といふとも、左様の事には遠慮會釋なく、子兒を大人にして、大人を老人にして、老人をおいとまとして、左様なら御苦勞様と、土の中につき落して、すぐ又あと製造の仕度にかゝるなり。順風に帆といふ

一代の者もあれば、悪浪に幾回か覆へらんとする一代の者もありて、ちと偏頗の處置に似たれど順境も順境の味感ぜざれば、矢張重荷を覺ゆるのみ。逆境も味ひ次第にては、なかなか趣味多きものなり。苦なり、樂なり、いろ／＼いひやうもあらんなれど、煎じつめれば、食へるか、食へぬかといふ問題に過ぎぬなり。食しところが、一日、米一升の上を越さず。食へぬところが、餓死の上はあらざるなり。而そこは妙不可思議のものにして、餓死して見たいといふ物ずきのあるとも、其望は果し得ざるなり。天生で養はざるはなしで、千萬人の中風自のものあるとも、餓死せしといふ事は、聞く極めて稀なり。萬々一、其稀なるもの一人となる運命に出會せしとして、大なる資本を投じて自ら製造せしといふ肉體にもあらず。つまり預りものであれば、惜しげもなき事ならずや。

一日が樂に暮せば、其の上の申分はなき事なるに、兎角現在をたのしまずして、未來を慮る情こそきたなし。子をもつ親は、子が他日能く親を養育してくれるや否やを氣遣ひ、子をもたぬものは、老後は誰ありて世話してくれるやと案じ、健康者は、今はすこやかなれど、やみては如何せんと憂へ、金あるものは、もし此金失ふこともありては、其日より如何にして暮さんかと配慮し、其事到着して後、始て策を講ずるとも晩きにはあらぬを、こ

これらの心配あるが爲めに、現在のおもしろみを没了して遂におもしろからぬ舟にのみ掉す。智者の所爲ともおぼはれぬにはあらずや。今年は、秋の月をながむるも、明年は如何なる方に身を寄する事かと、歌や詩には十分啼くもあしきにあらずれど、歌や詩の通りの愁嘆場を實行しては、このもろき肉體の勝ゆべくもあらぬなり。

是れ所謂る女史の哲學也。此の哲學や、現世的、現金的、當座的にして、其の旨義頗る淺薄、且つ少しく不健全ならざるにあらずと雖も、亦た以て自から哀傷の禁す可らざるを抑へ、憂苦の空湧を禦ぐに、力なしとせず。女史の哲學や、渴仰す可き程の價值あらず。但だ多しとするは、斯る哲學に安著して、其の精神の安慰ならざる迄も、其の平靜を失はざりしこと是れのみ。是れ丈夫兒と雖も、決して容易の業にあらず。況んや感情を以て、殆んど其の主要と爲す、柔性に於てをや。女史の尋常婦人にあらざるや、明けし。然も是れが爲めに、婦人の特性たる

同情と、眞率との、女史に於て、著しく滅殺せられたるは、自然の計算に於いて、已むを得ざる也。

女史の批評眼は、殆んど梟に類したりき。其の新聞記者に接したるの一節の如きは、死に垂んとしたる、柔性の筆とは、千考萬思するも、想ひ及ぶ能はざるものあり。

十日程以前に、親戚の書持参せしものあり。發熱中にて甚だ煩はしけれども、東京より來りしものをも、猶幾分浮世の義理の奴とて面會せり。商賈を爲さるかと思へば、新聞記者なりといふ。とんでもなき者引こみたりと悔ゆ。來りし記者よりも介者の不粹を憾めり。小話の後、寫眞を新聞にはのせませぬかといふ。さすれば此看板で十分じやと苦笑ふ。御近作をと又云ふ。近作なら、まだ腹の中に出來たてといふのもある。御身の手帳にかきて進せん。これで御容赦と目を閑ぢぬ。無愛嬌を立腹まざれに、なにかくかしのれぬとおもひしが、其翌日同新聞來る。眞の五、六行、形體瘠疲などの流調ならぬ文句をならべてありし、この筆にてはよくもあしくもかき能はぬならんと獨笑す。

若し夫れ女史が、其の侍女の東京花見を叙する一節の如きは、殆んど心理的解剖と、描畫との精酷に入るものなからず。

品女に向ひ江戸の春見て来てはといへば奥様昨今の御容體にてはといひつゝも其顔色はやくも動けり。同じくゆくならば花に先んずるも後れては憾みなり。六日の土曜日と定むべしと許せば、もはや足も腫につかれ様なるを、わが病の輕からぬにうれしといへず、却つて迷惑ながらといひたき風情を爲すもおかし。殊に醫の來りてこの事を聞き花見とはと色驚きしに、いよいよ間のあしきさまなり。即ち五日は其支度を爲し、あくれば

六日晴

申分のなき天氣に品は自然に笑へる顔を押し、何卒御大切にを繰り返して出ゆきぬ。

小説的文字としては、殆んど理想に近し。然も此の如き批評的觀察眼を有する婦人は、果して理想的奥様たる可きや、將た理想的婦人たる可きや、そは恐らくは疑問たらむ。

概して云へば、全篇の文字、何となく弾力を以て充滿し、殆んど五分

の隙間もなきの感あらしむ。敬愛の分量は、寧ろ少きに苦しむ、冷嘲の分量は、頗る多きに苦しむ。勝氣滿幅、轉た溫雅、寛厚の胸襟を缺く。處女的の眞率、献身的の同情、砂中に金剛珠を拾ふより難し。文章必らずしも其人を代表せずと雖も、若し文章によりて、其人を尋ねなば、聊か意地強く(敢て悪しきとは云はざれども)頗る主我的の、餘りに謙抑ならざる婦人の肖像、紙上に歴然たるを見る。惟ふに是れ唯文字の上よりして、然らんのみ。

但だ此の如き荒寥たる天地に於て、一團の和氣あるは、其の病を看護しつゝある老母と、其の二年前に永眠したる長城居士(信行男)に對する眞情のみ。老母は暫らく措き、其の亡夫に向ては、其の眷戀、愛慕の殷懇なる、殆んど人をして、情に勝へざらしむるものあり。其の最初に於て、同好相結び、其の最終に於て、同病相憐み。恩愛の情、遇

知の感、死に抵る迄、縣々として、竭きざるもの、冷淡なる讀者をして、殆んど冷淡なる能はざらしむるものある也。眞情の人を動かす、亦た方あるかな。

何となく明治時代の清少納言を聯想せしむ。

明治三十八年 五月十二日

記

者

十年の追懷

(日露外交十年史の序)

故川上
參謀總長

予は故川上參謀總長の知遇を辱ふし、屢ば軍國の問題に就き、其の意見を聽くを得たりき。其の遼東還附事件の前後に於ける、彼の感慨の一半は、予竊かに之を酌諒するの機會に接したりき。若し夫れ彼が軍備擴張の經綸に至りては、決して戰勝の餘威に乗じて、軍人跋扈の備を作らんが爲めにあらずして、蓋し十年の先を洞見したる、遠識爛眼に是れ由りし也。當時往々陸軍が、一躍して、其の兵數を倍加したるを見て、其の過大に驚きたる者ありき。然も今日に於ては、我が陸軍は、決して過大と謂ふ可らず。假令我に於て、制海權を得たりとするも、若し大陸に於て、彼の陸兵を、擊破するの優勢なるなくんば、極

東の平和を、恒久に維持するの希望は、到底水泡に歸せざる可らず。今や吾人は、眼前に於て、其の實物教育に接しつゝあり。其人亡しと雖も、其の遺策は、着々の中し、其の遺志は、着々實行せられつゝあるを感謝せずんばならず。

若し歴史は、繰り返すと云ふの要語を以て、一片の眞理ありとせば、歴史は、繼續すると云ふは、更らに大いなる眞理と謂ふを得可し。吾人は露國の來寇を以て、決して天災、地變の如く、偶然に發し、偶然に熄むものと、同一視す可らず。蓋し露國の來寇は、我が識者が、既に十年前に於て、否な五十年前に於て、否な恐らくは百年前に於て、豫期したる所なる可し。故川上參謀總長の如きも、其の較著なる一人たりしとは、本文の記者が、敢て自から證明する所を待たじ。予は露國の來寇と云ふ、何となれば今回の戦争は、畢竟彼より挑發し

かるものにして、其の形式に於てこそ、多少の異同あれ。其の實相に於ては、蒙古襲來と、殆んど同一なれば也。吾人は我より進んで露國征伐を企てたるものにあらず。假令露國は、多くの理由に於て、膺懲す可きも、我より喜んで此舉に出づるは、決して經世家の本意にあらず。但だ彼よりの來寇に對しては、我が帝國自衛の上に於て、極力之を擊退せざる可らず。所謂る進攻の態度を取るは、擊退の目的を達する所以にして、畢竟自から防衛するの實を全ふせんが爲めのみ。軍備擴張は、我より彼を侵かす可き施設にあらずして、彼の侵掠に對する準備なりしは、今回の事實、之れが明白なる馮證者たらずんばあらず。蓋し故川上大將の意、亦た必らず此に在りしならむ。

露國が極東侵略の志は、一朝一夕にあらず。記者嘗て露國に遊び、ペテルホープの離宮を尋ね、其の支那堂、朝鮮堂の諸室を覗ひ、支那、朝

鮮を以て、既に一個の屬邦視するの情態を見て、其の禍の早晚爆發す可きを豫期したりき。果然明治二十七八年戰役以來、彼は列國が之を遮妨するに、違まあらざるに乘じ、悍然として起ち、猛然として動き、其の傍若無人の勢は、三十三年北清事件に於て、特に其の極點に達し。爾來滿洲は、其の領土の如く、朝鮮は、其の外藩の如く、而して其の餘勇を鼓して、動もすれば我が帝國の版圖に、指を染めずんば止まざらん。識者が今日の事變を覺悟したる、夫れ豈に徒爾ならん哉。

本書は、主として露國の極東に於ける、最近十年間の運動を叙したるものにして、其の前に畧にして、後に詳なるは、時局の發展に伴ふて、其の權衡を持したるが爲めのみ。而して其の日露の外交關係を以て、經となし、其の列國の情勢を以て、緯とし、旁引、曲證、暢達、條直、殆んど極東十年の歴史を、一書に包容するに於て、餘蘊なきに庶幾し。

若し夫れ其の敘述の事實は、悉く信頼す可き出所ありて、一も架空、臆斷を雜へざるは、此書の特徴として、須らく江湖の鑑賞に値ひするものなくんばあらず。予や此書の著者と、日夕案を國民新聞の編輯局に對し、軍國の大務より、江湖の些事に至る迄、互ひに討論、切磋するの機會を専らにするの一人なるを以て、敢て自から揣らず、此書を、江湖に推薦するの榮を荷ふ。豈に漫りに好む所に阿ねるが爲めならんや。

然りと雖も若し此書の目的を以て、單に經過十年の記録に止まるものこそせば、恐らくは著者の本志にあらざる可し。夫れ歴史は、繼續す。吾人が十年の既往に就て、明白、精詳なる知識を得るの必要ありとせば、そは未來十年に對する、先見、豫期、準備の地を作さんが爲めならざる可らず。蓋し大和民族の發展は、歴史的事實にして、此の事實は、過去、現在、未來に、連接するの事實也。吾人は最近の歴史を講究す

個人の
壽命は
短きも
國家の
壽命は
長し

◎◎◎同時に、自個亦た其の歴史の製作者の要素たるを自覺せざる可
◎◎◎らざる也。而して今後の歴史の製作に於て、最も大切なる役目を擔ふ
◎◎◎ことを自覺せざる可らざる也。是れ今日に於て、此書の世に出でたる
◎◎◎所以の一ならむ歟。

嗚呼其の計畫者の墓石は、既に莓苔を生せんとするに際し、其の計畫
の結果たる軍隊の一部は、海を渡りて、將さに露兵と接戦せんとす。
個人の壽命は、短きも、國家の壽命は長し。英雄は自國の歴史を以て、
其の碑銘となし、愛國者は、國家を以て、其の墓田と爲す。個人とし
て、國家に對するの道、實に此に存す。偶々此書を読み、端なく十年
の歴史を回看し、故人を懷ふて禁ずる能はず。敢て胸臆を披瀝して、
大方の君子に訴ふ。其の所謂る他人の酒杯を假りて、自個の墨塊に澆
くの非難は、予が固より甘受する所也。

『新聞記者の十年間』に題す

本書の如何に興味に饒み、且つ或る部分の讀者に向て有益なる著述た
るかは、本書自からをして、之を語らしめよ。但だ予は著者其人に就
て、一言するを禁ずる能はざるものあり。

著者が新聞記者としての生涯の、十有餘年に亘りたるとは、乃ち本書
の名稱之を證せり。而して此の生涯の十中の八九は、國民新聞に關係
を有し、今尚ほ然ると亦た書中の所記によりて、之を知るを得可し。
是に由りて見れば、予と著者とは、文壇の耐久朋たると、固より言明
を俟たじ。然らば則ち予が著者に就て、少しく語らんとするも必らず
しも、僭妄の咎なかる可き也。

著者が國民新聞社と、關係を開始したるは、其の尙ほ京都同志社在學

著者新聞記
者としての
生涯

中なりしと記憶す。即ち著者は學窓中よりして、新聞記者たらんとするの素志を有し、而して志望の存する所、才能の秀づる所たりしを以て、遂ひに國民新聞と夙縁を締し、業卒へて直ちに入社したりき。世に偶然の理由よりして、其の境遇に處する者あり、止むを得ずして、或る職業に従事する者あり。然れども君は當初より新聞記者たらんと欲して、新聞記者となり。國民新聞に従事せんと欲して、國民新聞に従事したりき。此の一事は予最も善く之を知るが故に、敢て茲に特記せざるを得ず。

著者は國民新聞社に於て、先づ新聞記者の手腕を要する議會記者として、著しく其の伎倆を發揮したり。然も其の多角的の興趣を有する君は、其の一部に局促せず、或は文藝の評論に、或は外交の記事に、或は社會的觀察に、或は軍事通信に、其の年少邁往の氣に乗じて、八方に

筆鋒を揮ひたりき。恐らくは讀者諸君も、此の書中に於て、歷々當時の名殘を認むるならむ。然も新聞記者として、著者の性格、伎倆の發展は、明治三十年以降に於て、最も明らかに之を實驗するの機を得たり。此の年代は、我が帝國の世界に於ける位置の一大進化期にして、亦た國民新聞の日本の新聞界に於ける進化期と云ふ可く、而して記者としての君の進化期と云ふも亦た妨げざるに似たり。予は二十七八年役の後に於て、我國の新聞紙は、其の品格に於て、其の内容に於て、其の抱負に於て、日本を世界に代表す可き位置を占めざる可らざるを認め、世界週遊後、一層之を感ずると切に、遂ひに自から揣らず『國民新聞』を以て、其の理想を實行せんと試みたりき。而して實に著者に於て、其の忠實にして、有効且つ勤勉なる協戮者を

發見したるは、最も幸福なる理由と爲す也。

國民新聞は、黨熱最も激甚の日に於て、舉國一致論を主唱したり。減租論の最中に増稅論を喝破したり。多數の新聞は、所謂大新聞より小新聞に變じ、捕風の流説を傳へ、無根の事實を散じ、國家の利益も、個人の名譽も、新聞營業の爲めに犠牲とし、新聞記者の能事は醜穢、陋劣の記事によりて、野鄙なる讀者の下等なる趣味に投ずるにありと爲し、然らざれば許いて以て直と爲し、矯激以て義となし、無責任以て正となすの風潮に逆行し。眞に新聞紙中の紳士を以て自から任じたり。我が國民新聞が一時逆境に陥りたるも、決して偶然にあらず。頼ひに君及び二三君子あり、泰然として其の所信を貫き、今や稍く輿論の廻轉を見、我が國民新聞は、頑骨依然、自から好んで世好を迎へざるも、天下同情の士は、隨處に輩出するを見るに及びぬ。而して著

者○は○此○の○間○に○於○て、最○も○善○く○計○企○し、最○も○善○く○戰○闘○し○た○る○一○人○た○り○き。或○は○政○治○に、或○は○外○交○に、或○は○論○文○に、而○し○て○特○に○新○聞○編○輯○の○上○に○於○て、最○も○其○の○周○到、忠○實、勤○勉○な○る○特○質○は○發○揮○せ○ら○れ○た○り○き。若○し○夫○れ○明○治○三○十○年○以○降○の『國民新聞』に於て、若○し○世○の○信○用○を○博○す○可○き○點○あり○と○せ○ば、其○の○信○用○の○一○部○は、著○者○其○人○の○上○に○あ○り○と○斷○言○す○る○も、予○自○か○ら○過○當○な○り○と○信○ぜ○ず。予○は○恰○も○今○日○に○於○て、國民新聞が、著○者○に○負○ふ○た○る○債○務○の○一○半○を○償○却○す○る○の○機○會○を○得○た○る○を○快○と○す。償○却○と○は○他○な○し、之○を○識○認○し○之○を○言○明○す○る○と○是○の○み。著○者○の○新○聞○事○業○に○於○け○る、毫○末○と○雖○も、苟○も○す○る○所○な○し。其○の○叙○し、論○ず○る、確○實、允○當○を○旨○と○す。乃○ち○一○個○の○引○照○と○雖○も、必○ら○ず○其○の○出○處○を○分○明○に○せ○ざ○ら○ば、自○か○ら○安○ん○せ○ず。人○多○く○は○著○者○の○文○詞○縱○横○な○る○を○見○て、却○て○其○の○勤○勉、細○心、精○詳○な○る○を○知○ら○ず。然○も○予○の○最○も○著○者

に推服するは、彼にあらざして、此にあり。而して國民新聞の著者に負ふ所亦た然り。

『米僊畫談』に序す

畫伯久
保田米
僊

畫伯久保田米僊君、眼を病んで久しく癒へず。頃ろ其の美術談を口授し世に公にせんとするに際し、序を予に徵す。予や美術に於て、更らに研究したる所なし。然も君と相識る一日にあらす、焉んぞ不敏の故を以て、之を辭するを得んや。

君は現代丹青界の霸才也。天資敏妙、加ふるに考察の周到と、學習の博洽を以てす。君や流派に於て、株守する所なし。古今を論ぜず、東西を問はず、凡そ自個と觸著したるもの、一として參照擇採せざるなし。且つ一たび佛國に遊び、更らに米國に赴き、其の征清の役に於ては、病苦身に逼るに係らず、尙ほ筆硯を携へて、戎馬の間に從ふ。其の世界を以て粉本とし、天然と人事とを問はず、悉く之を畫題とし、

清新雄快、一種摸捉す可らざる活氣を絹織紙布の上に發揮するもの、
洵に偶然にあらず。

君や意匠に饒み、剪裁に巧に、染點に長ず。而して其の眼敏手快到りては、蓋し天稟と云ふ可し。之を現代の畫家に徵するに、若し其の特長を以て較すれば、或は君と争ふ者あり、或は君に駕する者あり。然も眼に觸るゝ者、一として畫題たらざるなく、手に觸るゝ者、一として畫帖たらざるなく、八面敵に當り、往く所として、可ならざるなきに到りては、君を推さざるを得ず。但だ君が累を爲すは、滿腹の霸氣抑へんと欲して克はず、才筆縱横、時に英雄人を欺くの態ありて、筆墨以外に、高情遠神を剩すの韵致と、雍容大雅、沈著雄渾の氣象とに於て、聊か慊焉たるものありしもの是れのみ。所謂る人は才の短を憂ふ、君は其の多きを憂ふるもの耶、否耶。

今や天は君に厄し、久しく筆硯を廢せしむ。此に於てか外に馳騁したる才氣を檢束し、夙夜思を凝し、頗る悟透する所ありと云ふ。若し君にして再び其の筆を搦らしめば、文晁何んぞ謂ふに足らむ。進んで止まずんば、或は永徳、山樂の徒をして、雄を前代に擅にせしむる能はざるに至るも、未だ知る可らず。然も今や僅かに空言に託して、其の胸中の所蘊の一斑を吐くに止まるは、豈に亦た悲しからずや。夫れ畫は、寫生に原かざれば、其の根底に於て正しきを得ず。然も寫生に局促す、是れ自然の奴隸のみ。所謂る畫家の本領は、自然に駕して、之に超逸するにあり。採金者が金を拾ふて砂を汰するが如く、自然の最美を觀て、之を描取するにあり。更らに詳言すれば、自然の裡に竊みたる美なる奥義を觀破して、之を畫幀の上に發揮するにあり。此に於てか尺幅の畫、亦た天地の秘密と、人生の意義とを解釋するの妙

諦となる可く、此に於て書も亦た始めて無聲の詩と稱す可し。
世間此の眼ある者、此の手腕なく、此の手腕ある者、此の眼なし。そ
れ天君に與ふるに悟透の機會を以てす、何んぞ之を實行するの機會を
君に向て愛しむや。知らず何の日か、君によりて、此の眞理を絹織紙
布の上に發揮するを得可き。暫らく記して、予が最後の希望を言明す
ると此の如しと云爾。

『時務三論』に序す

時務三論は、『帝國主義』、『アングロ、サキソン人種の教育』、『進歩の代
價』の三篇より成る。是れ必らずしも當初より一書をなさんが爲めに
起稿したるにあらざれども、其の脈絡自から貫通し、其の精神自から
透徹す。乃ち三論を合して、一論文と見るも亦た妨げず。

三篇中最も力を用ゐたるは、『帝國主義』の一文と爲す。其要之を哲學
的見解に求め、之を歴史的事實に質し、而して之を當今の時務に應用
し、帝國主義は、人類進化の情態に於て、止む可らざるを明らかにし、
其の歸著する所は、人道の圓滿に遂行せらるゝに在るを示したるもの。
乃ち『進歩の代價』は、其の緒言と見る可く、『アングロ、サキソン人
種の教育』は、其の附論と見る可き歟。

世の所謂正義家なるもの、動もすれば進歩の代價の過當ならんことを恐れ、人類進化の途上に沈吟彷徨し、漫に小惑に拘泥し、却て姑息偷安の人類總體を禍ひするの害毒たるを遺るゝものあり。而して他方に於ては、臨機應變家なるものあり。人類の歴史を以て、單に動物的交闘の記録となし、人間の運命は、唯だ弱肉強食の外に出でずと爲し、却つて人間の生存競争なるものが、其の實際に於て、人道の極致に達するの順路なるを忘るゝものあり。

惟よに此書一たび出で、兩者の惑を解くに、餘りある可し。吾人は自暴自棄するを要せず、悔恨痛歎するを須ゐず、將た沈吟猶豫するを俟たず、從容自若として、吾人の行かざる所に行き、達せざる可らざる所に達するを勵む可きのみ。即ち吾人は清淨なる手腕と、純潔なる良心とを以て我が極東の大帝國を、二十世紀國際的角逐の裡に、扶植

するを得る也。著者の意をこれに在る乎。

それ衷心何の煩悶なく、眼界更らに透明。雄快なる歩趨を以て、自ら信じ、自から安心したる道を行く。一國の民心此の如くにして、國家の進運始めて期す可し。若し本書にして、果して幾分にてても、此の目的を達するを得ば、著者の志、全く酬るたりと謂ふ可し。若しこれ本書が、ギッデングス氏の『平民主義と帝國主義』、ラインシュ氏の『世界政治』、ジモラン氏の『アングロ、サキソン民族の長所』等の諸書に負ふ所の多大なるは、特に予の明言を俟たざる可し。予は本書の著者と相知る甚だ淺からざるものあり、故に著者に代りて畧ぼ本書の成る所以を一言すると此の如し。

『二十新論十種』に序す

世に處する第一の要義

吾人の世に處する、第一の要義は、世を知るにあり、世を知るの第一要義は、世の思想に觸るゝにあり。如何にして世の思想に觸るゝを得ん乎。世の代表者とも稱す可き人の意見に徴する是れ也。若しくは世の一部、或は有力なる一部を代表したる人の意見に徴する是れ也。本書の收むる所は、或は思想家の意見あり、或は實行家の議論あり。或は經世實用の文字あり、或は理想深遠の卓説あり。或は事を主とし、或は理を主とす。或は國勢を揣摩し、或は哲理を推究す。其の議論の一定ならざるは、其の論者の位置の一定せざるが如し。然も當今の人士にして、當今の意見たるは、其の揆を一にせずんばならず。要するに本書の目的は、世界に於ける現代人士の最近意見を紹介する

本書の目的

にあるが爲めに、其の翻譯の如きも、文辭を主とせずして意見を主としたり。但だ其の意見の紹介に到りては、譯者の忠實なる義務を盡すに於て、大ひなる怠慢なかりし事を、予亦た保證するに於て、遲疑せざる也。

世界的知識

予は實に此種の書籍を、我が國民に推薦するに禁ずる能はず。何となれば我が國民をして、世界的國民たらしむるの第一義は、實に世界の思想に觸るゝにあれば也。別言すれば世界的知識に直接するにあれば也。而して本書の如きは未だ充分ならずと雖も、其の目的に達するに於て、頗る輕便にして且つ有益なりと信すれば也。

『濟民記』に序す

本篇の主人公、富田高慶は、二宮尊徳翁の高足弟子也。翁の教旨を奉し、之を相馬藩に實行したる大人也。

蓋し二宮翁の教旨たる、勤儉力行、餘りあるを節して、以て足らざるあるの日に應ずるにあり。若し翁の教旨をして、世に行はしめば、天下一人の恒産なきものなく、恒心なきものなかる可し。富田高慶の如きは、之を奥州の一隅たる相馬藩に行ひ、大ひに其の治蹟を擧げたりき。而して其の餘澤今日に到りて、民に及ぶもの多しと謂ふ。

社友吉田君は、本篇の主人公と、其の郷貫を同ふす。其の事蹟に就て、頗る詳悉する所あり。頃る之を編著し題して濟民記と云ひ、予に二言を徴す。予の知る所を以てすれば、世間既に富田高慶傳なるものあり。

然も語りて精ならず、説ひて盡さざる所あり。今や此の冊子を閲するに、其の人物を説き、其の事功を語り、更らに其の感化に及ぶ。所謂富田高慶及び其の濟民的經歷は、殆んど擧げて漏らす所なきに庶幾し。

若し二宮翁の教旨にして、濟民の道に裨益ありとせば、此書の如きは、翁の教旨を具體的に説明し、併せて其の實行の方法及び効果に及びたるもの、其の治國の要に於て、裨益少からざるや知る可きのみ。

世間往々經濟と、道德とを以て、相ひ矛盾するものと爲す。焉んぞ知らむ、經濟の基礎は道德にあり、事功の根原は、品性にあり、利用厚生の術は、誠意誠心、勤儉力行の中より生じ來るものなるを。若し此の眞理を看取せんと欲せば、試みに此の冊子を一讀せよ。蓋し思ひ半ばに過ぎるものあらむ。

『帝國主義と教育』に題す

本書は、浮田和民君の著作にして『日本の帝國主義』及び『帝國主義の教育』の二篇より成る。而して之を總稱して、『帝國主義と教育』と名けたるは、後篇が其の分量に於て、本書の重なる部分を占めたるのみならず、其の全冊に通じて、著者立言の大主腦、教育の二字に歸着すれば也。

『日本の帝國主義』の始めて『國民新聞』によりて、世に公にせらるゝや、頗る識者の注意を惹起し、英字新聞の如き、亦た之を採録、論評したりき。蓋し世に帝國主義を口にするもの多し、然も帝國主義の何物たり、且つ特に我が日本帝國の國是とす可き帝國主義の何物たるを、闡明したるは、實に著者を以て、其の隨一とせざるを得ず。世或は著

『日本
の帝國
主義』

者と、其の所見に於て、異同あるものあらむ。然も彼等と雖も、其の諷示、刺戟、啓發に向て、著者に負ふ所あるを否む能はざる可し。

『帝國
主義の
教育』

『帝國主義の教育』は、前篇の續稿として、『國民新聞』に現はれたりき。其の論議縱横、條理分明、洵に近時の大文章たり。然も吾人が之を大文章と云ふは、其の混々滔々たる長篇なるが故のみならず。其世上の耳目を聳動したる、良に所以あり。

今や江湖の君子、吾社に向て、更らに兩篇を、一冊子として、刊行せんことを勧めらるゝもの、一にして足らず。乃ち著者と詢り、其の訂正を経て、茲に此の冊子を成しぬ。吾人は此書が世上に歡迎せらる可きを疑はず。何となれば是等の文字は、新聞紙上、雲烟一瞥に附し去らる可きものにあらす、保存せられ、普及せられ、精讀せらる可き價値ありと信すれば也。

今春滿洲問題の酣はなるや、著者の經世の見識と、憂時的熱血とは、鬱勃として迸出し、乍ら前篇となりて、出で來れり。後篇亦た國家の爲めに、當今の大勢を達觀して、百年の大計を畫したるもの。蓋し著者は世の所謂る侵畧論者にあらず、又た國粹論者にあらず。其の意惟らく國家をして、國際的壓迫の時代に處し、其の堅實なる隆昌を得せしめんには、國際條規に隨伴して、以て活動進取する所あらしめざる可らず。國家をして此の如くならしめんには、先づ國民をして、其の資格を修得、具備せしめざる可らず。是れ著者が反覆講究したる所に於て、予亦た屢ば其の論緒を與かり聞くを得たり。而して前後兩篇共に。此の主旨を以て、一貫す。故に本書の命名あり。

今や學術專攻の風熾にして、専門以外、寸前暗黒、爲めに動もすれば學者の無學者多く。偶々博學の士あるも、燕雜にして、其の學識の統

一を缺く。且つ學問と實際との距離は、千里雷ならず。其の調和の期、何の日にあるを知らず。是れ實に通弊と謂ふ可し。著者の如きは然らず、學問の精華を咀ひ、之を當世の時務に適用す。其の議論精明にして迂僻ならず、其の思想切實にして根柢あり。是れ予が平昔推服する所にして、本書の如きは優に其の證人たり。

古人史を作るに於て、才、學、識の三長を説けり。著者の如きは、既に哲學的教養あり、又た史的常情あり、加ふるに文學的趣味を以てす。故森田思軒君は、最も批評眼の精嚴を以て、同人間に推重せらる。彼嘗て著者の其の亡夫人を傳するを讀み、感涙自から禁せず曰く是れ至文なりと。それ宇宙大觀の哲理を經とし、人事精察の史識を緯とし、之を組織するに俊明醇實なる文章を以てす。君の論作家として、今日に傑出するも、決して等閑にあらず。但だ其の名利に淡く、謙退自か

ら甘んず、是れ著者が少数識者の爲めに識認せらるゝも、未だ社會より當然享受す可き待遇に與る能はざる所以なる歟。然も其の京都同志社にあるや、同志社生徒の望みたり。其の東京専門學校に聘せらるゝや、亦た其の最も衆望を負ふ教師の一人として數らる。所謂る桃李言はず、下自から蹊を成すもの乎。予は未だ著者の爲めに、其の不遇を悲しむ可き理由を見ざる也。

著者や學を好むと雖も、單に書齋的人にあらず。常に意を當世の問題に注ぎ、最も慷慨時事を論ず。且つ其の血性あり、俠氣あり、好んで人の急に赴くもの亦た天性也。但だ此の血性の爲めに、時として哲學的靜思、常識的平衡を妨げらるゝの場合なきを必とせず。然も是れ驟雨一過、依然たる青天白日のみ。而して君が教育家として、青年の望を得る所以は、寧ろ此に存せずんばあらず。此の論文の氣魄あり、光

焰あり、剴切、痛快、亦た職として此れが爲めならずんばあらず。而して其の交友の爲めに、愛好せらるゝ一の要素は、蓋し亦た此にある可し。嗟呼著者の如くにして、始めて眞骨頭ある學者と稱す可き哉。

予や著者と相識る、既に二十有五年。互に其の趨向を同ふせざるも、相ひ逆ふ莫し。頃る著者書を寄せて曰く、前後二論文の成る、實に君の德憑に出づ、請ふ其の因由を一言せよと。予敢て辭せず。而して言の著者其人に及ぶは、予に於て頗る僭越の責を免れず。然も尙ほ且つ敢てするは、予實に中心黙止する能はざれば也。

若し夫れ本書の名稱を定め、篇章を分ち、彫題を設け、句讀と、圈點とを附したるが如き、一に予の責に歸する所にして、著者の關知する所にあらず。

『惠磨遜の書簡』に題す

コンコ
ルドの
哲人の

本書は所謂コンコルドの哲人と稱せられたる惠磨遜エマルソンの某友に與へたる書簡をば、其の親友の一人なる教授ノルトン氏の編纂したるもの也。其の由縁は、編纂者の緒言に詳かなり。

ノルト
ン氏の

ノルトン氏は、嘗てカーライルが、米國に於ける唯一の紳士と評したる人也。縦令其の言に幾分の誇張ありとするも、亦た以て氏が大西洋兩岸の識者間に敬重せられつゝ、あるかを知る可し。氏は實に新英州に於ける文學黄金時代、最終の代表者にして、今や諸老凋落の後に於て、單り綠陰岡に棲遲し。尙ほ明星の曉天に沈まんと欲して、未だ沈まざるの光景を剩まし居れり。

惟に本編は、氏がダンテの傳、ゲーテ、カーライルの往復文集、若

友情の
凝結の

しくはカーライル、エマルソンの往復文集、其他多産の編著にける、最終のもの、然らざればそれに近かきもの、一なる可し。是れ或は氏が亡友の清き紀念に酬ゆる友情の凝結なるなからんや。

惠氏の
肖像の
墳墓の

予嘗て氏を米國ケンブリッジの綠陰岡ジェネービルに訪ひ、清談半晌、竊かに聞く所に差はざりしを歎しぬ。本書の明治三十二年出版せらるゝや、氏其の一本を寄せ來れり。予之を自から私するに忍びず、同人に託し、之を『國民新聞』に譯載せしめたり。而して今や更らに嚴密なる訂正を施し、且つ未だ譯載を経ざりし五篇を加へ、之を一書として世上同好の君子に頒つこととなしぬ。原文玉の如く、譯文瓦の如きの非難は、敢て避くる所にあらず。然も本書を譯したる社友が、其の最善の力を竭したるは、亦た讀者の恕察を仰かんと欲する所也。

本書に附するに、惠氏の肖像と、其の墓墳とを以てしたり。是れ共に

惠氏の令息博士ニマルソン氏が、予に贈りたる所にして、氏の語る所によれば、乃翁の肖像多しと雖も、未だ此の如く其の本來の面目を活躍せしめたるものなしと云ふ。予は本書と相俟て、其清高温雅なる大人に面接するの感を、讀者諸君に與ふ可きを疑はず。

若しそれ『惠磨遜』の一文は、予が特に本書に添へんがために草したるもの。若し蛇足の責なくんば、僭越の責を免かれじ。然も或は此れが爲めに、本書の真相を發揮するに於て、讀者に小補あらば、予に於て望み足る也。

『ヴ井クトリヤ女皇』に序す

小横井翁の句に曰く、『人君何天職。代天治百姓』と。予は英國の女皇に於て、殆んど人君の天職を全ふしたる摸型を見る也。

女皇が十八の若齡を以て、其位に即き、八十有餘の高齡を以て、其の永眠に就く迄、六十餘年間の生涯は、實に進化の生涯也、發育の生涯也。而して亦た克己、献身的の生涯也。此の生涯は實に後人に多くの教訓を與ふ。

吾人は此の六十餘年間に於ける、英國國運の開發が、殆んど過去六百年間の歴史と、其の程度に於て、何れが多なるかを判別するに苦しまざるを得ず。而して此の國勢變轉の大機に處して、其の宜しきを得たるもの、之を個人の力に求めば、亦た最も女皇の人君たるの天職を

全ふしたる効果に歸す可き理由を見ずんばならず。蓋し英國が世界的勢力たるの原因は、其の由來する所久し。然も英國が世界的大勢力として、識認せられたるは、實に女皇の治世に在り。女皇若し自から此の氣運の率先者たらずんば、少くとも此の氣運を能く調和し、此の氣運と契合したる所ありしや明けし。其の經世的識度亦た偉なる哉。

然りと雖も女皇に多しとするは、之に止らず。夫れ女皇は、眇然たる小女の身を以て、未だ人生の眞味を解するに違あらずして、夙に無上の位置に登り、未だ中年ならずして、寡婦となる。之を普通の個人に求むるも、女皇の如く重大なる試煉を經來りたるもの多からず。而して其の壓迫する責任、痛楚たる哀傷の裡にありて、尙ほ其の踏む可き常徑を失せず。是れ偏へに人君の天職を自覺し、之を遂行せんと欲し、此れが爲めには、百事を犠牲にするを顧みざりし忠實なる心事に由ら

ずんばならず。惟ふに適所に適事を行ひ、適時に適言を出だすの練達に到りては、女皇時代の大宰相比伯、虞翁と雖も、殆んど企て及ぶ能はざりし技倆を有したるも、單に之を以て女皇の本領と爲すは、抑も末のみ。

第十九世紀は平民主義の横流したる時代なりしに係らず、英國の政界は、女皇時代に於て、著しく平民政治化したに係らず。皇室の國民に於ける信戴と尊崇とは、登極の當時を以て、之を今日に比すれば、實に天淵も晉ならず。蓋し英國の立君政治は、女皇時代に於て、殆んど磐石の上に築かれたるの觀あり。是れ帝國主義が平民主義に代らんとする時代の現象たる可しと雖も、亦た最も多く女皇の君徳の、國民の赤心に感應したるに頼らずんばならず。

若し夫れ其の婦人として、家妻として、母として、女皇の殆んど非難

なき行徑が、人君としての女皇に、如何に光輝を添へたるかは、固より予が言明を要せざる所也。

頃ろ社中宮田君、女皇の一代記を編し、序を予に徴す。予偶々感ずる所を記して、君に質し、併せて讀者諸君に質す。嗚呼女皇の一代記の如きは、單に後の人君たる者の龜鑑のみならず、亦た茅屋に住する人間の龜鑑たる也。編者の意、それ此に存する歟、編者の意それ此に存する歟。

『近極東外交史』に序す

孟子曰く、春秋に義戦なし、彼是れより善きものは有り。極東近年の時局を大觀すれば、亦た方々に斯く言はざる可らず。單り此間に於て、異彩を放ちたるは、我が二十七八年の役と、三十三年北清出征是れのみ。然も二十七八年の役が、支那分解の發端たる可かりしは、未測的命數なりき。否な本意ながらも歴史的事實となりぬ。極東時局の歴史は、吾人に向て、外力の侵蝕は、恒に抵抗力の少なき方面に向ふの原則を、誨示す。別言すれば極東最近史は、弱肉強食の實物教育也。領土と云ひ、主權と云ふ、唯だ是れ空名のみ。山河の險あるも、海洋の隔あるも、國境には、分明なる標柱あるも、苟も之を擁護するに足るの國民なきに於ては、總ての物皆な無用のみ。今日に於て國を

建て、民族の獨立と、膨脹とを遂成するの道、他なし。唯だ自疆不息にあり。詳に言へば、自から他の壓迫に對抗するの力、充溢するにあらざれば、一國の獨立すら、之を全ふするを難しとす。況んや世界に雄飛するをや。

頃ろ社友武田源次郎氏、近時極東外交史を編し、一言を叙せんとを求む。予之を一閱して、其の簡にして要を得たるを嘉みし、自から感ずる所を記し、之を著者に質し、併せて此書を読む君子に質すと云爾。

『近時之外交』に序す

近時國際政局の推移、人をして應接に遑まあらざらしむ。而して特に明治二十七八年日清戦役後に於て、然りと爲す也。

極東の
交争地

從來の國際政局は、殆んど其の舞臺が、歐洲に限られたりき。今や然らず、世界到る處、其の舞臺たらざるはなし。而して特に極東を以て、極東の中に於ては、特に支那を以て、其の交争地と爲す也。

國際政局の糾紛錯綜せる、到底吾人の端倪する能はざる所なる乎。焉んぞ夫れ然らむ、人間の行爲は、又た人間の眼識を以て、之を看破するを得可し。苟も其の事實に就て、諦視せん乎。必らず脈理の尋ぬ可く、徑路の辿る可き者なからざるを得ず。

蓋し本書の如きは、若し完全なる近時外交の指南車と謂ふ可らざるも、

少くとも其の信馮す可き案内者の一たるを失はず。其の問題の多端にして、其の觀察の方面の多角なる、或は人をして亡羊の嘆を免かれざらしむるが如き憂なきにあらず。然も若し讀者自から平正なる判斷力と、堅實なる考察力とあらば、必らず釋然として會得する所あらむ。蓋し今日の外交は、帝王及び宰相の外交にあらずして、國民の外交也。而して其の離合の動機は、主として國民利害の衝突、一致、此れが原因たらずんばあらず。若し夫れ其の外交の勝敗は、外交術の巧拙よりも、寧ろ所謂る外交力の多少に存するを見る。而して外交力とは、國民的實力也、別言すれば其の國家に充滿する富強の力也。外交術の掛引も、國民的實力此れが後援となりてこそ其の甲斐もあれ。若し然らずんば空言何の補かあらん哉。強國の拙外交は、弱國の巧外交に優ると萬々なるを知らずや。

吾人は此書の讀者が、切に上記の點に就て、思を竭さんとを希望すと云爾。

今や實力の試験は、日露兩國間に實行せられつゝあり。

明治三十八年 五月十八日

記

者

『帝國建設者』に序す

横山雄偉君は、篤志の士也。頃る『帝國建設者』の一書を編し、序を予に徴す。

帝國建設者とは、何ぞや。蓋しセシール、ローツの評傳是れ也。予はローツの無制限なる崇拜者にあらず、されど吾人は彼に於て英人に特種なる冒險を愛し、活動を愛し、健闘を愛し、而して其の理想の實現を愛する性格を、最も多大に發見す。彼の理想は、アングロ、サキソン人種を打て一丸となし、其の自から信ずる所謂の優秀なる人種をして、世界を經營せしむるにあり。彼の眼中には、英なく、米なし。彼の眼中には、唯だアングロ、サキソン人種あるのみ。彼の理想は、未だ高尚と云ふを得ず、されど彼の氣魄と、志望とは、世界も未だ大な

セシール、ローツ

時代精神の権化

一生の快人

りとするに足らざる也。彼は單に英人の或る代表的人物たるのみならず、又た二十世紀の時代精神の権化と云ふも、不可なきが如し。彼は一種の夢想者たり、但だ彼に多しとするは、其の夢想を實現せしめんとするの精力と、企謀と、且つ経略との、混々として盡きざるにあり。彼の性格や、俗の方面より見れば、大俗也。されど其の志趣の超卓なる方面より見れば、其の光明、磊落なる、眞に一生の快人たるを失はず。吾人若し虚心平氣に、彼の言行を觀察せば、豈に彼に就て學ぶ可きもの少小ならんや。是れ恐らくは横山君が、本書を編したる所以の一ならむ歟。抑も予竊かに感ずる所あり、英國の世界的な勢力となりしは、僅々百年前後の事に過ぎず。十六世紀の末に於て、英國エリサベス女皇時代の偉人、サー、ウォルター、ローレー嘆じて曰く、『和蘭より英國に來

りて貿易する船舶、毎年五六百艘に下らず、而して我國より和蘭に赴く船舶は、僅かに三四十艘に過ぎず」と。英國の所謂る海上の大勢力となりしも、畢竟チャルソン以來の事と謂ふを以て、確實と爲す可きに似たり。若し夫れ彼が世界的大帝國の基礎たる殖民に著手したるも、エリサベス女皇以後の事にあらずや。

此の如く和蘭、葡萄牙、西班牙、佛蘭西の後にいで來りたる後進國が、一躍し、二躍し、三躍し、四躍し。遂ひに世界的な大勢力となりし所以は何ぞや。蓋し其の重なる原因の一は、英人の個人的膨脹性の發揮是れ也。個人前に動き、國家後に應ず。時としては國家は已むを得ず、詮方なしに個人の活動を識認するに止まること多し。若し英國の膨脹史を編せんとする者あらば、須らく個人の膨脹史に着眼せざる可らず。ローレー、クライヴ、近くはローツの如き、是れ其の昭明、較著なる

例と見る可し。

今や我が日本帝國も亦た實に活動の中途にあり、今日に於て横山君が本書を編したるの微意、豈にそれ多言を須たん哉。讀者玩味して必ず自から得る所あらむ。

到來の珍籍

高遠なる理想を有する者は、之を踐行するの實力を缺き、實力の豊富なる者は、高遠なる理想之に伴ふもの少なし。人事意の如くならざるもの、此れより甚だしきはなし。若し或は兩者併有するを得ん乎、人生の至樂、此より大なるはなかる可し。而して此の如き境遇は、纔かに夢寐の際に於て、之を見るを得るを幸となす也。

明治三十三年の三月、友人米國新英洲のウエド翁、一本を寄せ來る。封を披けば、清雅、優麗、既に尋常の書籍にわらざるを知る。表包は、柔軟なる草色の一枚熟皮を以てし、裡面には緋色の繻子を貼し、更らに板紙を其の中間に挿ます。而して其の表包の上部に、風帆船を凸印せしめ、其の側らに『古代舟師』ゼ、エンシエント、マリナーコルリッジ作の數字を、金字もて凹印

す。卷を開けば、藍色にて印刷したる船體あり、而して其の船體の陰より跳り出でんとしつゝある金色の太陽は、全く手描になりたるものなりき。其他每章の首尾には、必ず飾畫あり、或者は半ば手描にして、半ば印刷になり、或者は全く印刷になりたるものと思はる。全紙一百零二頁の菊版のみ。而して卷中餘白天に縮まりて、地に濶し。本文は普通の墨にして、題字、若くは每章の首字、及び飾畫は、藍色、朱色、及び罕に金色を用ゆ。發刊書肆の名なく、亦た代價附けなし。但だ『ロイクロフト工場』に於て出版す、一八九九年、版權所有エルパート、ハッパードと記載したるのみ。予は固より其人の何者たるを知らず、其の工場の何物たるを解せず。唯だ友人の贈りたると、其の比類なき出版物たるの故を以て、之れを珍重したりしのみ。

然るに本年五月、亦たウエド翁より書籍郵便物到來す。之を披けば、

前者と畧ぼ同一の模型たる三冊あり。一は勅撰詩家テニソンの大作『モ
ド』にして、表包は海老茶色の柔靱なる一枚の熟皮、裡面は同色の
琥珀絹にして、其字形は概してウキリヤム、モリスの創製したる『ケ
ルムスコット』印刷所のもを襲用したるに似たり。然も注意す可き
は、寧ろ他の二冊にあり。兩冊與に濃茶色の柔靱なる一枚の熟皮の表
包にして、裡面は何れも同色の琥珀絹なり。其一は詩人ソーシーに、
他は音楽者ショウパンに關する小評にして、兩者共に評題の主人公の
肖像を、巻首に挿む。而してソーシーの肖像と相ひ對する巻首の第一
頁には本書の名題及び作者ハッパード氏の名を記し。其の周圍には、
精緻巧麗なる手描の圖紋を施せり。其の色は、水色、淺黄色、金色、
茶色、橙色等にて、燦爛目を奪ふものなしと雖、亦た雅人の珍賞に値
ひするものあり。而して其每章の首字には、略ぼ如上の飾圖あり。何

れも手描なれば、特に尊きを覺ゆ。且つ又たショウパンの肖像と相ひ
對する巻首の第一頁にも、前書と其の意匠を同一にしたる手描の圖紋
を施したり。但だ最も多く鶯色を用ひ、且つ鶯色、草色等を用ひたる
の差あるのみ。兩書何れも菊判四十頁内外の薄冊なれども、其の薄冊
なるが故に、之を輕視す可らざる理由の一は、左の特色あるが爲め也。
詩人ソーシーの小評に關する冊子に、著者は特筆して曰く、
此の出版物は、此度僅か九百四十部を印刷したるのみ。而して、其
の印刷及び殊に其の挿圖は、皆な手工に成れるものにして、本卷は
其の第三百五十九冊目のものなり。

エルバート、ハッパード

著者は其の號數と姓名とを自記自署したり。即ち活版は手刷にて刷り
圖畫は手描なるものたると、此によりて分明なりとす。而してショウパ

ンの小評に關する冊子も亦た然りとす。唯だ其の號數が、七百五十六冊目たるの差あるのみ。即ち此の兩冊は、天地間に各々九百四十部あるのみにして、予は九百四十分の一を有するものと謂ふ可し。是れ豈に愛惜す可きの至りならずや。

予は以上四冊の珍籍を愛惜措く能はざると同時に、其のハッパード氏の何人たり『ロイクロフト工場』の何物たるを知らんと欲するの情、轉た切なるを覺へたりき。而して六月の末端なく英國の雜誌『スピカー』を警讀したるに、左の如き記事に遭逢したり。試みに其の大意を譯述すれば、左の如しと爲す。

新刊の四季雜誌『シユライン』は、紐育州の一村東オーロラに於て大に成功したる社會改良實行の一記事を載せたり。之によりて見るに、其の實行は、一八九五年エルバート、ハッパード氏が創めたる『ロイ

ロクフト工場』の印刷業を中心とし、次に手工的裝圖業を始め、また製本業、指物業、粘土細工、及び他の手工を加へ、漸々發達して、終に全村の社會的生活を其の内に包容するに至れり。三百人以上の村民其の工場に働き、改良事業の感化の爲め村民の生活状態は一變せり。『ロイクロフト工場』は、また二種の雜誌(第一は『フィリスティン』なり)を發行し、其の發賣部數は十萬にして、其の收益及び他の事業の所得の恩惠は、皆な其の組合の共同に受くる所なり。

『ロイクロフト工場』には、圖書館あり、保養室あり、繪畫あり、彫像あり、到處に花卉あり、各々の室にピアノあり、毎夜舞踏會、合奏會、講義會の開かるゝあり、個人教育の機會は絶へず與へらる。職工の周圍の美と、彼等が享くる所の自由と、彼等の交際に於ける愉快と親切とは、必ず彼等が忠實に其の仕事の上に現はすべしとは、

創立者ハッバード氏の確信する所なり。氏曰く職工の生活の爲めに與へられたる此等のものは、皆な化して善となり、美はしき結果を以て、再び職工の指頭より出で來ると。

ハッバード氏は種々の職業に従事したる人なるが、其の社會改良の實行を企つるに至りたるは、英國の詩人にして意匠家たり社會主義者たるウヰリアム、モリスに會して感激する所ありしが故なり。

モリスとハッバード氏は同じ理想を有し、モリスは、當時其の理想を遂行して、國人の趣味に變化を與へつゝありき。

若しモリスが今日まで生きて、機械的事業を其の偶像の如く尊ぶ國人中に、彼の理想が迅速に擴がりしを見れば、蓋し大に自ら驚きしならむ。ハッバード氏は其の組合を起して後二年、自ら事業に就て講義を始めたなり。是に於て、斯かる小仕掛なる事業を基礎として

起りたる、此の歎賞すべき手工者の小組合の名聲は、廣く知らるゝに至れり。此の組合の成功の知らるゝまでは、都會は田舎の生血を吸集して涸らし、機械は手工を滅ぼし、而して歴史は共同生活實行の成功したる一の例證をも記せざりき。社會が斯く成り行くは必然の事となされたり。然るにエルバート、ハッバードは此の必然の事となされたる所を翻へせり。氏は一小村に於て、よく手工を其の墳墓より救ひ、而して田舎は都會よりも有益に事業をなし得る事、平和と調和と美とは、都會の機械工場のない能はざる所をなし得る事、及び工業的共同生活は、不可能の事にあらざるを示したり。

米國民の、新精神を受け容るゝ能力、及び其の高尙なる理想を慕ふ固有の性質は、よく斯の如き事業の高貴なる意義を解し得るなり。眞の手工者の精神は、今日多くの人に米國の性格を表示するものと

せらるゝ、唯物主物の狂劇匆忙に對する鎮靜劑なり。抑も實業的活
動は、米國民の性格の一部分に過ぎずして、米國民中には尙ほ理想
の花が、他國に勝りて美はしく榮ふべき豊潤なる餘地を存す。

予は最早此の記事に蛇足を添ゆるの必要を感せず。其の數字より云へ
ば、千萬億兆也、其の生活より云へば弱肉強食也、其の活動より云へ
ば、大仕掛の器械的也。而して思ひやき此の如き熱火沸々たる社會に、
「ロイクロフト工場」の如き、幽閑、清素、健全、優美なる小天地を産
し來らんとは。

予はハッバード氏が理想を實行しつゝある、至樂の境遇を健羨するのみ
ならず、亦た其理想を實行し得る力あるを嘆美する也。予は實に上記
の珍籍に對して、萬感の衷より湧き來るを禁する能はず。

至樂の
境遇を
健羨す

讀史漫言

妄想湧
き來る

◎歴史を讀めば、種々の妄想湧き來る也。其の面白き時代に遭著する
毎に、何故我は其の時代に生れざりしやと憾む也。

危機一
髪の時

◎或る危機一髪の際に際し、試みに巻を掩ひ、冥想すらく、斯る場合
には、如何に處す可きかと。例せば關ヶ原陣に際して、吾人は東軍に
與す可き乎、西軍に與す可き乎と。

英人は
海賊の子
孫也

◎歴史の事實を、自個の思ふ通りに假設すれば、限りなき興味生ず。
例せば西郷南洲の征韓論實行せられたりとせば、其後の形勢如何なり
し乎。或は又た家康秀吉に先んじて逝きたりとせば、慶長の政局は如
何。無用の想像なれども、興味ある想像也。

◎英人は海賊の子孫也、露人は山賊の子孫也。此を以て彼等は、今に

至る迄、其の素生を忘る能はず。

◎我が歴史に於て、最も愉快なるは、和寇の歴史也。明治二十七八年役の勝利を以て、之を豊太閤征韓役の勝利の影響に歸するものあれども、溯りて考ふれば、和寇の武勇に負ふ所、少小ならざるを知る可し。即ち日本人は、懋るしき者なりとの先天的恐惶心、既に戦はざるに先じて、支那兵の戦氣を沮喪せしめたりと謂ふも、不可なき也。

◎我國の和寇は、宛も一種の剽盜のみ。海賊なる英人は、海岸に上陸し、内地に侵入し、愈よ久ふして、愈よ去らず。山賊なる露人は、山澤の中に闖入し、一たび入れば、決して出でず。唯だ我國の剽盜は、飛鳥の餌を啄むが如く、一來、一去、遂ひに其の痕を止めず。◎若し我が和寇にして、英國の海賊の如くならしめば、今日に於て何んぞ南清經營を要せんや、何んぞ福建不割讓の條約を要せんや。和寇

は我が國民の鏡也、雛形也、長所に於ても、短所に於ても。

◎或は境遇に餘り重きを措きて、個人の勢力を無視するものあり。或は個人の勢力を、過重視して、境遇の勢力を看過する者あり。今日の學者は、寧しろ前者に偏するを、免かれざるが如し。然も個人の勢力、決して侮る可らざる也。

願くは昔日の失敗を、即今に繰り返へす勿れ。

明治三十八年 五月十五日

記

者

讀餘雜記

銷夏の要は、讀書に若くはなし、讀書の要は、吾が讀む所を以て、吾心に照らすに若くはなし。照らして會意の點に到れば、殆んど炎熱の身に迫るを覺へざる也。

◎進士を驅つて學究と爲す

科目之設、士趨所、向、宋科目有明經、有進士、明經即今經義之謂也、進士則兼以詩賦、當時二科並行、而進士得人爲盛、名臣將相、皆是焉出、蓋明經雖近實、而士之拙朴者牽爲之、謂之學究、詩賦雖近於浮豔、然必博觀泛取、出入經史百家、非士之高明者不能、自安石爲相、黜詩賦、崇經學、科場專以經義論策取士、然士專一經、白首莫究、其餘經史付之度外、謂非己事、其學誠專、其識日陋、其才日下、是

進士を驅つて學究と爲す

信一の迷

◎一の迷信

獨存當時明經一科、而進士之科遂廢矣、安石有言、初意驅學究爲進士、不意驅進士爲學究、亦自悔之也、由此觀之、一得一失、已自瞭然、老成之士何苦過爲曉曉一也、(張仲和「千百年眼」二節)
宋代學問の弊、移して以て明治時代學問の弊を評す可し。學究、學究、夫れ汝を奈何。

最も多くの人の有する一の迷信あり。そは、人各々其の特殊確定の性質を有するものなりとなす事是也。即ち或人は親切に、或人は殘忍に、或人は賢明に、或人は愚鈍に、或人は敏活にして、或人は無感覺なりとなす事是也。人は決して、斯の如きものにあらず。吾等若し人を評せんと欲せば、宜しく、彼は殘忍なる事よりも、親切なる事多く、彼は痴鈍なる時よりも、賢明なる時多く、彼は無感覺なるよりも、敏活なる時

多しと言ふべく。若しくは其の反對に言ふべき也。或人に就て、彼は親切なり、彼は賢明なりと云ひ、他の人を以て、彼は奸悪なり、彼は愚昧なりと云ふが如きは、大なる過誤なるべし。然れども、吾等は斯くして、常に人を分類す。然かも是れ決して眞實を示すものにあらざる也。

人は猶ほ河流の如し。凡ての河の水は皆な同じ水にして、少しも異なる所なし。然れども各の河、此處に狭く、其處に急に、此處に緩く、其處に廣く、或時は冷みに、或時は冷かに、或時は鈍く、或時は暖かなり。人も亦た實に然り、人各々凡ての人性の萌芽を有す。或時は一の萌芽顯はれ、或る時は他の萌芽顯はれ、同じ人は依然として同じ人なれども、時としては、全く異りたる人の如くなる事あり。(トリストイ伯「復活」書中の一節)

人間は活物也、時々刻々變化しつゝある活物也。悪人たりとて、永久に悪人たるにあらず。善人たりとて、永久に善人たるにあらず。英雄も時としては兒女たり。兒女も時としては、英雄たり。苟も人を視んと欲せば、其の境遇の變化に就て之を見よ。思半ばに過ぎむ。

◎前後の工夫

夏す可き普請を、寒天にせば、人夫は草臥、事々敷手間入るなり。木の伐る時、竹の伐る頃、誰も知ることなり。生木を運べば、事々敷人夫入るなり。木六竹八と申せども、松は正月伐りたるがよきなり。又柴薪等前廉に伐り置き、枯らして運びたるが、一倍も徳分にて、之ある可く。萬事前後の工夫ある可きことなり。(本多佐渡守談話)
其の語る所、平々他の奇なし。然も是れ小處小用す可く、太處大用す可し。眞に是れ受用盡さざるの要訓たり。